

地獄もいろいろ
阿蘇は生きている
神々が降臨した地
島でなくても桜島
福岡の大濠公園
福岡の名刹 東長寺
海の中道と志賀島
太宰府天満宮に詣でる
阿蘇から高千穂峡へ
能古島ってどこの島？

目次

87 73 67 59 56 53 37 22 9 1



西海道の旅

高野敦志

長崎の爆心地

長崎のグラバー邸

長崎の出島

長崎の伊王島

天草五橋に来てみれば

天草の海にいるか？

キリシタンの島天草

雲仙地獄と島原半島

島の外まで平戸かな

「指宿」は「いぶすき」

あとがき

170154143135123116111106101 96 91

表紙 開聞岳（鹿児島県）

地獄もいろいろ

僕が初めて九州に行ったのは、まだ三十代に入ってほどない頃だった。新幹線で広島の人人に会い、厳島神社に参詣した。翌日の午後には博多行の新幹線に乗った。日豊本線の「にちりん33号」に乗り換え、別府に着いたのは午後五時だった。

その夜は別府のユースホテルに泊まった。すぐに夕食を取った。若い人が多いのかと思つたが、温泉地であるせいか、同室は年配の人ばかりだった。梅原猛の本を愛読するおじいさんは、遣唐使が水の補給を行った福江島の港を一目みたい、帰りに終戦時に除隊した佐世保に寄りたいと言っていた。

二十年前には戦争体験者が大勢いた。伯父は特攻隊員で、あ

と一週間戦争が続いていたら、敵艦に突っ込んでいたはずだった。父も予科練に入隊していたから、丸太で腰を叩く「精神注入棒」の話などしていた。敵基地をミサイルで攻撃するとか、空想的な戦争オタクなどは、一喝いっかつされていたことだろう。

ユースホステルの風呂は温泉だった。しみ通るようにつかえが拡散していった。何度も浴槽に出入りするうちに眠くなった。ベッドの中に入ると、低くうなるような音がした。外はひどい降りになっているようだった。

島倉千代子の歌に「人生いろいろ」というのがあった。「人生いろいろ 男もいろいろ」という歌詞から、勤務実態がない会社に所属していた小泉純一郎首相が「人生いろいろ 会社

もいろいろ 社員もいろいろ」とお茶を濁していたのを思い出した。

地獄がどんなものか知りたければ、源信の『往生要集』を読めばいい。針の山や血の池地獄だけではない。人間の想像力がどこまで残酷になれるかが分かる。「地獄もいろいろ」というわけだ。地獄と言えば、火山地帯には「地獄」と名がつく地名が多い。草木も枯れる荒涼とした風景が、地獄を連想させたのだろうが、不用意に近づくことで硫化水素りゅうかを吸い、命を落とした者がいたことから、近寄ることを禁じたのだろう。

その一方で、人間には「怖い物見たさ」がある。別府には地獄巡りをするコースもつが設けられている。ただ、むやみに怖がる必要はない。恐山おそれざんで感じたような、鬼気迫る印象はないのだ

から。別府に着いた翌日、ユースホステルを出た僕は、鉄輪行きのバスに乗り、終点で下車した。

いよいよ地獄巡りである。最初に訪れた白池地獄は、白濁した温泉である。何だ、そんな温泉なら入ってみたいと思うかもしれない。色が青みを帯びた白であるのは、池に出て温度と圧力が下がったためだという。ちなみに、噴出時には95度もある。

金竜地獄は共通の観覧券は使えず、現在は閉鎖されているらしい。僕が訪れた時は、喉にいい蒸気を吸ったり、しょっぱい温泉を飲んだりした。湯けむりが上がる池や、噴気の脇に立つ青龍、地獄の釜、地蔵菩薩に阿弥陀如来など、地獄をイメージさせるアトラクションの要素があつた。

鬼山地獄は赤鬼の巨像が立っている。でも、鬼の顔はどこかコミカルで、禍々しい感じは乏しい。温泉熱を利用してワニがたくさん飼われている。どういう趣向か、ちよつと理解できなかった。

かまど地獄というのは、温泉の噴気でお供えのご飯を炊いたことから名づけられた。地獄の一丁目から六丁目まであり、泥の混じった温泉が、坊主頭のように噴き出しているのが印象的である。

山地獄は岩山の塊全体から湯気が上がっている。温泉熱を利用した動物園である。巨大なカバやクジャク、ゾウなどもある。現在はカピバラが人気を集めているようだ。カピバラと言っても、ピンと来ない人がいるかもしれない。アマゾン川流域

に生息する巨大なネズミで、全身タワシのような毛が生えている。のんびりやさんなのだが、ユーモラスで奇妙に愛嬌がある。福岡市の海の中道海浜公園で見えて以来、僕もファンになってしまった。

地獄の中で最も美しいのが海地獄。エメラルド・ブルーの麗しい色をしているが、表面は白い蒸気に包まれ、湯の噴き出し口からは、ゴーゴー無気味なうなり声が聞こえてくる。美しいからと言って、手を突っ込んではいけない。ここの温度も95度だ。その奥には温室が見える。オニバスはまだ生育中だったが、可憐なハスがピンクや黄色、紫などの花を咲かせていた。

いったん、鉄輪の停留所に戻り、バスで血の池地獄に向かった。そこは思ったほど赤くなかった。煉瓦色といったところか。

なるほど、赤い粘土の色なのだそうで、皮膚病に対する効能があるという。一九二七年（昭和二）に爆発を起こし、二二〇メートルも噴き上げ、近くの売店を破壊したらしい。温泉の噴き出し口なのだから、そうした事故もあるということだ。

最後に見たのが竜巻地獄、いわゆる間欠泉である。三十一〜四十分一度、地下の空洞にたまった温水が気化した勢いで、五分間噴き出す現象である。以前は二十メートル以上噴き上げ、雨合羽をかぶりながら見たそうだが、今は高く上がるのを防ぐために、石垣で囲われてしまっている。

安全性ということを考えての措置だと思われるが、自然の驚異を枠の中に閉じ込めることで、娯楽施設の見世物にしてしまっている。自然に対する崇敬の念がある人間なら、こんなこと

は考えない。

アメリカのイエローストーン国立公園では、大きな間欠泉が雄大なしぶきを上げるさまが見られる。こちらは四十五分おきに決まって噴き上げる。地下には世界最大のマグマだまりがあり、いつの日か超巨大噴火を起こすとされるが、九州も火の国であってカルデラは多い。阿蘇が破局的な噴火をすれば、九州の大半は火砕流で焼き払われてしまう。温泉の恵みはそうした脅威と隣り合わせているわけだ。

阿蘇は生きている

僕が子供の頃の地学の本には、活火山、休火山、死火山という区別があった。桜島みたいに年中噴火しているのが活火山、富士山のように三百年昼寝しているのが休火山、有史以来噴火していないのが死火山と説明されていた。

ところが、死火山だと思われていた木曾^{きそ}の御嶽山^{おんたけさん}が噴火したことで、こうした区別が無意味だということが分かった。火山が噴火する周期はまちまちで、中には数万年の休止期間を経て巨大噴火するものもある。

阿蘇山は中岳^{なかだけ}だけが時々噴火しているから、活火山ということになるのだが、ここで問題になるのが、阿蘇山の大きさであ

る。実は、中岳は巨大噴火の後にできた出張所みたいなもので、外輪山に囲まれたカルデラ全体が阿蘇山なのである。

火山というと高い山を想定しがちだが、火山の残骸さんがいのような窪地くぼちや、湖になっている地形全体が火口だったりする。北海道の大きな湖、屈斜路湖くつしゃろこや洞爺湖とうやこ、支笏湖しこつこも、巨大な火山の火口に水がたまったもので、かつての阿蘇にも、満々と水をたたえた湖が存在したという。

さて、別府駅からは日豊本線おおいたで大分駅に出た。そこから豊肥ほうひ本線のおそ4号に乗り込んだ。本線といっても単線で非電化、ディーゼルカーが大野川沿いの山あいを走っていく。北海道のローカル線みたいなものだ。先頭の車両の最前列に座っている

ので、非常に見晴らしがいい。

阿蘇駅に到着した。阿蘇中岳の火口を見たいと思ったが、ロープウェイが濃霧のため運休になっていた。そこで、草千里くさせんりにある阿蘇火山博物館を見に行くことにした。客が僕一人なので、バスはなかなか発車しようとしていない。

およそ十分遅れの三時半に出発。濃霧の中を走っていく。何となく不安な気がした。真っ白な霧の中に、ただ一人取り残されてしまうような。山腹の料金所で、運転手は係のおばちゃんおばちゃんと熊本弁でおしゃべりしている。下方には阿蘇のカルデラに広がる田畑や町並みが見渡せる。ようやくのどかな気分になってきた。

バスは霧の中を走っていく。まだ青葉が芽を出す季節ではな

いので、草原は冬枯れしたままである。ところどころ、侵食によって谷が形成されつつあり、そこに葉を落とした灌木かんぼくが生えている。

草千里に到着した。霧が晴れて天上より日が射さしてきた。前方に小高い丘がそびえており、左右に小さな池が二つ見える。その上を霧が盛んに流れていく。五月になれば、さぞかし美しいことだろう、草原が彼方まで広がるさまは。丘を登っていく人たちが豆粒のように見える。

阿蘇火山博物館に入った。最上階ではパノラマ映像が上映されており、カルデラ内部に広がる草原や、中岳の噴火の様子がリアルに紹介されている。下が展示室となっており、阿蘇山の模型が展示されていた。

阿蘇は巨大な火山であり、南北二つの島だった九州を、一つの島にまとめるほどだった。大量の噴出物を出したために、自身の重みに耐えきれず、陥没してカルデラを形成した。そこに二万年間、湖が存在したことも分かっている。その後、中央部で火山活動が始まって隆起し、湖水が流れ出して現在の姿になった。

阿蘇ユースホステルに泊まった。風呂に浸ひたかっていると、若い子が声をかけてくれた。年齢の差も忘れて楽しくおしゃべりした。とはいっても、この時の自分はまだ三十ちよつと過ぎだったわけだが。同室には都内の日本語学校に通っていた台湾の若者もいた。帰国する前に九州と北海道を旅行すると言ってい

た。

翌朝、台湾の若者陳さんと草千里に向かった。バスで山道を上っていると、同室だった学生二人が歩いているのが目に入った。ユースホテルの宿舎と食堂の間をうろついていた犬もいたので、バスの中から手を振ると応えてくれた。

昨日も来た草千里に降り立った。天気は相変わらず曇。からっと晴れ上がってくれない。どうしようかと思つた。陳さんは歩いて阿蘇山西駅まで行くらしい。写真を撮つて別れを告げると、陳さんは「また会うよ」と答えた。「再見」を直訳したのだろうか。

僕は阿蘇火山博物館の向かいにある「オルゴール響和国」という小さな博物館に入った。その地下には、近代ヨーロッパの

大型オルゴールの名品が展示してあり、典雅な響きを実際に聞かせてもらった。大きな洋画が飾られた内部は、さながら貴族の館といった趣だった。ゼンマイ仕掛けで、鳥かごに入った剝製の小鳥が、嘴と首を動かしながら、ふいごの力でさえずるからくりには舌を巻いた。

上の階には、人の拍手で反応する人形のオルゴールなど、現代の家庭向けの機械が並べてあった。オルゴールというものは、レコードが生まれる前の自動演奏機ぐらいにしか考えていなかったが、自然の神秘を模して人造人間、ゴレムを造ろうとした危険な情熱につながるものを感じた。

オルゴール響和国を出て、草千里を歩いていくと、乗馬をさ

せてくれる所があった。短いコースで五分ほどらしいが、千円だというので、生まれて初めて馬に乗ってみることにした。

馬に乗ると、視線がかなり高くなる。鞍くらの上についた柄えを握り、足は鐙あぶみにきちんと入れる。左右に多少揺れるので、自分でバランスを取らねばならない。僕のような体重のある男に乗られて、ちよつと気の毒な気がした。馬はぼくぼくと、歩くこととのみに集中している。時折、いなないていたが、興奮しているとという感じはない。

小高い丘の手前で折り返した。人に引いてもらっていたとはいえ、常に馬の気持ちを思いやっていないければならない。こちらの思いを察して馬も歩むからだ。戻つてくると、すぐに馬草桶まぐさおけに首を突っ込んだ。やはり、お腹が空くのか。

バスに乗って阿蘇山西駅に行くと、陳さんと再会することができた。今日もまた、火山ガスのためにロープウェイは運休だとのこと。禁止されているけれども、こつそり登つていこうかなどと陳さんと話していたら、風向きが変わった途端、火口から一キロ半も離れているのに、卵が腐つたような臭いがしてきた。

周りの人たちが咳せき込んでいる。僕もにわかには詰まり、喘息ぜんそくの発作が起きたように苦しくなった。これほど強烈な火山ガスは、箱根の大涌谷おわくぐたにでも体験したことがなかった。驚いてバスの待合所へ逃げ込んだ。

本当に危険だ！ たとえロープウェイが動いていたとしても、火口に近づいたら息苦しくなつてたことだろう。草原の広がる

カルデラはのどかに見えるが、これは巨大火山が吹き飛ばされた痕跡であり、周囲の外輪山は残骸に過ぎない。中岳は草原に覆われた阿蘇のマグマが、牙の先端を覗かせた口というわけだ。

草千里で陳さんと別れ、昼食を取ることにした。陶板焼きと
いうのを食べた。陶器のふたがついたプレートで、牛肉を焼い
て食べる料理である。レストランの窓から、登山道で見かけた
二人と黒い犬が、斜面で遊んでいるのが見えた。

昼食の後、草千里の正面にある小高い丘に登ることにした。
風が強かったので、それこそ真冬の寒さを感じた。まだ青草が
出ていないので寂しいが、広い空間に人の姿はまばらにしか見
えない。はるか下方、丘のふもとと池の間に、轍が一筋の土

のラインを描いていて、馬に乗った人がのどかに過ぎていく。

空はどんよりとしている。遠方の中岳の峰からは、もくもく
と白煙が上がっている。火口まで登れる日は当面なさそうだ。
余りの寒さにじっとしていられず、馬がつながれた辺りを目指
して下りることにした。途中で見た池は澄んでいたが、数日晴
天が続けば干上がってしまいそうだった。

今度は草千里の左方にある丘に登った。ここからは中岳が迫
って見える。下のカルデラには人っ子一人いないので、広大な
草の窪みを我が物としたような気になった。

先ほど登った向かいの丘では、数人の人影が動いている。ふ
ざけ合った声が伝わってくる。耳を打つ風の音が聞こえた。独
りになるのがこれほど心地よいとは、今まで思ったことがなか

った。町の中で見知らぬ人に囲まれているのは対照的な、安らぎに満たされていた。大自然の懐ふとしろに抱かれるというのは、こうした感覚を言うのだろう。

午後五時過ぎのバスで、ユースホステルに戻ってきた。ただ一つ、気がかりだったのは、山上までついてきた黒い犬のことである。あの人なつっこさが災いして、草千里に取り残されてしまったのではないかと思ったからだ。

同じ部屋に泊まっていた青年が、黒い犬と一緒にいたことが分かった。あの犬と杵きしまだけ島岳を登っていくと、中岳の火口が風上部分だけ見えたそうだ。本当はバスに乗りたかったのだが、犬がついてきていたので、帰日も登山道を一緒に戻ってきたとのこと。

実は、黒い犬はユースホステルで飼っているわけではなく、誰かが連れてきて、そのまま居着くようになったらしい。知らない者でも温かく迎えてくれる宿だからこそ、犬にとっても居心地がいいんだろう。泊まりに来る若者にすぐになつて、阿蘇を駆け巡っているいうわけだ。

夜は知らない者同士、雑談をするのが楽しみである。会ったばかりの相手なのに、身の上話なんかしている。名古屋から来た大学生は、雨天でバイクのエンジンが止まりそうになったのをこぼしていた。パチンコ屋でバイトしているんだが、プロレスをけがしてやめた人などもいて、話をするだけでも面白いと言っていた。

神々が降臨した地

熊本地震のため、阿蘇はすっかり姿を変えてしまった。阿蘇大橋は崩落し、豊肥本線も阿蘇以西が、南阿蘇鉄道も立野たてのく松間が不通となり、いまだ復旧の見通しが立っていない。このまま放置されてしまわないかが気がかりだ。阿蘇中岳も噴石を飛ばす噴火を繰り返している。僕が訪れた二十年前は、まだ日本が平穏だった頃である。

朝食を食べると、ユースホステルを飛び出し、豊肥本線に乗り込んだ。列車はスイッチバックし、立野駅に入っていく。下りた列車はふたたびスイッチバックして進む。ここで南阿蘇鉄道に乗り換えた。

この鉄道の見どころは、立野駅を出てすぐ、トンネルとトンネルの間に架けられた第一白川橋きやうりやう梁である。トンネルを出た途端に断崖絶壁で、闇から抜け出た列車は、谷間を見下ろすように空中を進む。列車がスピードを落とすと、乗客はすかさずカメラのシャッターを切る。

絶景に架けられたアーチ橋も、熊本地震で大きく損傷し、架け替えの費用が捻ねん出しゅつできるかが大きな壁となっている。そこを通り過ぎると、のどかな田園地帯をのんびり進む。雨が降ってきた。窓に水滴がついている。晴天ならトロッコ列車が走るとのことだが。

高森駅に着いた。高千穂へ行く特急バスは、高森町役場前か

ら出発する。ぎりぎりです間に合い乗り込むと、バスは山道をおねくねと進む。濃い霧がかかっていたが、これこそ瓊杵尊が降臨した高千穂の峰だと思った。

実は、このルートを鉄道が走るはずだったのをご存じだろうか。南阿蘇鉄道（旧高森線）の高森駅と、廃止される以前の高千穂鉄道（旧高千穂線）をつなぐ構想があったのを。その中ほどに「トンネルの駅」がある。高森く高千穂間は難工事です、大量の出水によりトンネルは貫通することなく、残された掘削部くつさく分は焼酎しょうちゆうの酒蔵さくらとして使用されている。目印は道路脇に設置され高千穂鉄道の車両である。

高千穂大橋を通り過ぎて、高千穂バスターミナルに到着した。コインロッカーに荷物を預け、タクシーで高千穂峡の入口まで下りていった。そこからは曲がりくねった道を、徒歩で下っていく。玉垂の滝の向こうに、若山わかやま牧水まきすいの歌碑を認めた。

幾山河越さりゆかば寂しさの
はてなむ国ぞけふも旅ゆく

五ヶ瀬ごかせがわ川のほとりにおのころ池がある。『古事記こじき』の国生み神話で、伊弉諾尊イザナギノミコト、伊弉冉尊イザナミノミコトが最初に生み出したとされるおのころ島が、池の中央に立っている。島といっても、石塔がようやく一つ立つほどの大きさだが。「天沼矛あめのぬぼこ」の先からしたり落ちたしずくとされる。

海の水をかき混ぜたのなら、塩の結晶ということになるだろ

う。もしこれを男女の性の営みとして考えるなら、「天沼矛」は男根で、水面は臍、したたり落ちたのは精液ということになるわけか。

おのころ池の先にある茶屋に入った。店員の娘は藍染めの着物姿で、そうめん流しの長い台や、石を組んだ囲炉裏がある鄙びた店だった。寒かったので。火で手を温めたあと、囲炉裏の脇の席に腰を下ろした。鱒寿司はおいしかったが物足りない。串に刺して焼いた味噌味の豆腐田楽に、柚子粉と唐辛子をたっぷりかけた。おまけに、ぜんざいまで食べたなら、ようやく元気が出てきた。

ボート乗り場へ行ってみることにした。小道をたどって谷底

まで下りていく。成人してから一度も漕いでいないので、どうしようかと思ったが、乗らなければ素晴らしい光景も目にすることができない。

思い切って借りたのだが、案の定、漕ぎ方を忘れてしまっていた。しばらくは逆方向に進んだりして戸惑ったが、ようやく要領をつかんだ。五ヶ瀬川は深い緑色で、切り立った両側の崖は、陽光が射し入るのを遮っている。刃物ですぱっと切り落としたかのように、岩の表面は平らで、三角、四角、または台形の石柱が屏風状に連なっている。

石の橋を過ぎると、薄暗い淵に真名井の滝が清冽な水を注いでいる。これは天孫降臨の際に、天村雲命が天より水種をもたらした姿を写している。神々が切り刻んだ刃のような天然

の彫刻は、阿蘇山が巨大噴火を起こしたとき、押し寄せた熔岩ようがんが川の流れて急速に冷やされたもので、上流の窓ノ浦から下流はきあいの吐合まで続いている。

岩の表面はうっすらと苔むし、所々ところどころキシダが生えている。その上には、刺身の切り身のような形の岩が、幾重いくえにも重なっている。とてもこの世に属する空間とは思えない。日本人の魂の深層に流れる川を、小舟で漕ぎ進むかのような。流れはほとんどないので、櫓ろを止めて微かに漂う岩の薫りかおを嗅ぐ。

安らぎの時は長くは続かなかった。ボート乗り場に戻ると、遊歩道まで上っていき、先ほど漕いだ淵を見下ろした。ボートでの恍惚はすでに遠ざかり、過去のイメージのように結晶化が始まっていた。それにしても、上から眺めても飽きることもな

い。絶景だな。日本が誇れる風景だと思う。

遊歩道の檜飛橋やりとびばしを過ぎ、高千穂大橋の手前で石橋を渡った。階段をぐっと上って高千穂神社の裏手に出た。境内の手前に種田山頭火の句碑があった。

分け入っても分け入っても青い山

高千穂バスセンターまで歩いた。そこから天岩戸あまのいわとに向かう。

『古事記』によれば、太陽神である天照大神アマテラスオオミカミが、荒ぶる神である須佐之男命スサノオノミコトの狼藉ろうぜきに耐えかね、洞窟どうくつにこもって天岩戸を閉めてしまった。そのため、地上では様々な異変や怪事が起こった。昼間でも太陽が出ないのは、日食によるものか、巨大噴

火による火山灰によるものか。また、天照大神のモデルは、卑弥呼ひみこではないかという説もある。

地上が暗闇になったので、八百万やおよろずの神々は天照大神を洞窟から出すための策を講じた。天鈿女命アマノウズメノミコトという女神が、肌をあらわに踊りを始めたので、神々が大笑いした。それを聞きつけた天照大神は、天岩戸を少し開けて覗こうとした。そのとき、タチカラオノミコト手力男命が天照大神を引き出したことで、地上に光が戻ったのだという。

その天岩戸を神域として祀まつるのが、天岩戸神社である。参拝を済ました後、岩戸川の谷底にある天安河原宮あまのやすがわらぐうへ向かった。そこは小さな家一軒ほどの広さの岩屋で、鳥居の手前に縄を引いて結界けっかいしてある。奥には木の社やしろが設けられ、辺りには賽さいの河

原のように、大きい石の上に幾重にも小さい石が積まれている。

地上の世界が闇となったとき、八百万の神々が、どうやって天照大神を引き出すか策を練ったのが、この天安河原宮だという。薄暗い岩屋には、目にははっきり見えない神々の気配があった。そこから天岩戸神社まで上るのには、かなり骨が折れた。

天岩戸に向かう道の前には、立派な木の門があつて、参拝を希望する者へは宮司ぐうじが案内するとあった。観光客などには、軽々しく見せぬというのだろう。社務所に行ってみだが、宮司はいかめしい顔つきなので、ご寄進いたしますと言って、気持ちだけを差し上げた。

まず、門の前で櫛さかきにつけた水によりお清めを受け、西本宮の奥にある遥拝所ようはいしよへ向かった。谷川まで半分ほど下ったところ

で、屋根を設けた建物が現れた。対岸の正面には、洞窟らしきものが見える。木々が生い茂り、何度も崩れかけたのだろう、下の方は土砂に覆われている。その辺りは禁足地きんそくちで、村人はおろか宮司も足を踏み入れたことがない。天岩戸を覆っていた戸は、天照大神がふたたび隠れてしまわないように、信州の戸隠とがくしに隠してあるという。

高千穂バスセンターに戻った。それから高千穂駅に行くのが大変だった。駅は坂の上にあり、しかも雨が降り出していたからだ。泊まる予定の高千穂ユースホステルは、隣の天岩戸駅のそばにあると聞いていた。

当時はまだ、高千穂鉄道は廃止されていなかった。二〇〇五

年（平成一七）の台風で五ヶ瀬川の橋が流出し、復旧することなく廃線が決まったのだ。第二セクター方式で存続しても、ひとたび大規模な災害に見舞われると、赤字路線では放置されてしまうのだ。

ユースホステルに電話したら、車で迎えに来てくれた。くたくだだったので助かった。チェックインして部屋に入った。天岩戸駅の下にあるので、窓からは高千穂橋梁の全貌ぜんぼうが望める。川面からの高さが東洋一で、一両編成のレールバスが、おもちやのように、上空に架けられた鉄橋をトコトコ走っていく。

寝坊してしまった。まだ昨日の疲れが抜けていない。朝食を

取って、九時過ぎにチェックアウトした。天岩戸駅まで歩いて行くことにした。ペアレントのおばさんに道を教えてもらい、「着いたら大声で教えてよ」と言われた。

あぜ道を上っていくと、無人の駅にたどり着いた。ホームの一番端、ちょうど高千穂橋梁の付け根の辺りから、谷間のユースホステルを見下ろした。人の影のようなものが見えるので、手を振ってみた。

「着いたの？」という叫び声が聞こえた。

「着いたよ！」と答えると、「行ってらっしゃい」の声。

「有り難うございます。行ってきます！」と大声で叫んで手を振った。

まさか本当に声が聞こえるとは思わなかった。こうして声を

かけてもらい、ちよつぱり胸が熱くなった。

実は、天岩戸駅には十五年後の二〇一一年（平成二三）の秋にも再訪している。すでに高千穂鉄道は廃止されていたが、高千穂駅と天岩戸駅の間を、「スーパーカート」で往復したのである。今では高千穂橋梁まで延長されたので、東洋一の高さから、五ヶ瀬川の谷底を見下ろせるようになった。

さて、話を元に戻そう。ディーゼルカーに乗り込んだ。高千穂橋梁をゆっくり渡っていく。僕はユースホステルの方を見下ろした。すべてがちっちゃく見える。神々が地上を見下ろしたときのように。鉄橋を渡りきると、列車はスピードを上げていく。

高千穂鉄道の半分は、トンネルと鉄橋の連続だった。相当の難工事だったのだろう。駅も崖の上のような所にあつた。観光的に価値のある景観が続いたが、スピードを落とさずにカーブを抜けるので、軽い乗り物酔いになつた。喉がからからなのに、飲むと吐いてしまいそうだった。目を閉じて耐えているしかなかつた。

島でなくても桜島

日豊本線に乗っていた。鹿児島県内に入ると、左方に桜島が見えてきた。竜ヶ水りゅうがみずの辺りは、数年前に大水害があつた所だが、対岸に桜島が望まれ。手前が入江になっており、日射しが青い海を照らしている。南国らしい風光だと思つた。

桜島は錦江湾きんこうわんにそびえる火山島だったが、一九一四年（大正三）の大噴火で、大隅半島と地続きになつてしまった。桜島も危険な火山ではあるが、本体は錦江湾の底に眠っている。巨大カルデラ噴火で、吹き飛んだ大地に海水が入り込んで、広い湾となつているのである。

当時はまだ九州新幹線は開通していなかつた。鹿児島駅は意

外に小さかった。市電に乗り換えて市役所前で下り、鶴丸城跡へ向かった。そこには石垣と堀のみが残り、跡地には資料館が建っている。

この城はもともと天守閣がなく、屋形づくりとなっていた。それは「城をもつて守りと成さず、人をもつて城と成す」という薩摩藩の理念によるもので、兵農一致の郷士団が多数組織され、武士の数が非常に多かった。一般には五公五民であった年貢も、薩摩藩では八公二民の高税率となり、農民の不満を団結へと導きやすい浄土真宗は、切支丹とともに禁教とされたのである。

城山に登ることにした。ここは西南戦争の舞台となった所である。小高い丘を小鳥の声を聞きながら林の道を進んでいった。

展望台からは桜島と、隔てる海峡、そして鹿児島市内が一望に見渡せる。
西郷隆盛も最期に、この風景を眺めたのだろうか。ちなみに、西郷が自刃したとされる洞窟は、ここからはかなり離れている。北東方向で日豊本線の線路脇に近い位置にある。西郷は果たして城山で死んだのだろうか。

明治の元勳だった西郷が、不本意な死を遂げるはずがないと、多くの人々が当時から思った。ロシアに亡命したという噂が流れたが、これは源義経が平泉では死なずに、モンゴルに渡ってチンギス・ハンになったという伝説と同じである。「もうここらでよか」という言葉を残して自刃したというのが、やはり真実なのだろう。

ただ、西郷のよく知られた顔は絵画ばかりで、弟の西郷従道じゆうどうと従弟の大山巖おおよやまいわおの顔を参考に、画家のキヨツソーネが描いた物が有名である。本当の顔が分からないことが、西郷亡命説の流布るふに拍車をかけたのでないか。

桜島に向かう船に乗った。船長室の傍らのベンチに腰掛けた。潮風を満面に受ける。対岸の姿が見る見る拡大されていく。その夜は桜島のユースホステルに泊まった。

ここにはさまざまな若者が泊まりに来ていた。青春18切符で日本全国を旅している大学生とか。僕はスイス人の青年ともつばら話していた。スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語の地区からなっている。彼の母語はドイツ語だが、フランス語

も英語も流暢りゅうちやうである。僕は英語とフランス語を使ったが、やはり英語の方が話しやすい。

夕食の後、彼と非常階段の上に出て、桜島の夜景を眺めながら話した。彼は桜島の山頂が立ち入り禁止になっているのを残念がっていた。最後に噴火したのはいつかと言うので、城山で買った桜島の写真を見せた。真っ赤になった山頂と、立ち上る噴煙、そこに走る稲妻。信じられない！写真にフィルターでもかけたのか、本当に超現実的だと英語で話していた。

ちようど、百武彗星ひやくたけすいせいというのが地球に接近していた。肉眼でも確かめることができた。北斗七星のすぐ下にあり、ぼんやりと大きく明るくなったり、暗くなったり、またたいているように見えた。

翌日はどんより曇っていた。本当はサイクリングしたかったのだが、小雨が降り出した。そこで、桜島一周の定期観光バスに乗ることにした。桜島港から右回りに巡ることになる。

ガイドさんは桜島の噴火について、いろいろ話してくれた。

一七七九年（安永八）の安永大噴火では、海中から多数の島が出現した。多くは再び海中に没したが、中には周囲四キロもある島もあった。これは浸食されて周囲一キロ半になった新島のことで、燃島とも呼ばれている。小学校の分校も開校したが、過疎化が進んで、その時点ではいた住民も移住し、二〇一四年（平成二六）には無人化したという。

黒神地区では、埋没鳥居を見た。これは一九一四年（大正三）

の大正大噴火により、高さ三メートルあつた腹五社神社の鳥居が、上部の笠木を残して埋もれてしまったもので、黒神村の六八七戸すべても熔岩に呑み込まれた。

かつて大隅半島の間には、幅四百メートル、水深七二メートルの海峡があつた。大正大噴火では、流れ出した熔岩が、雪崩のように折り重なり、海底から噴き出した方も、小石を重ねたように盛り上がった。海峡を埋め尽くした岩場は、有村展望台からも認められた。

現代の日本人は、火山の本当の恐ろしさを知らない。一つの集落を埋没させるほどでも、火山爆発指数は4で、数字が1上がるごとに規模は10倍になる。桜島の本体で錦江湾の海底にある始良カルデラは、指数7の巨大噴火を起こしており、これは

日本を滅亡させるほどの規模である。

女流作家林芙美子はやしふみこの文学碑は、古里公園ふるさとこに建っている。森光子もりみつこが演じた『放浪記』の原作者で、女給をしながら小説を書いていた。流行作家になったが、朝鮮戦争のさなかに過労で亡くなった。

「花のいのちはみじかくて、苦しきことのみ多かりき」とある。右脇に女史の銅像が寄り添っている。

赤水あかみずの桜島焼き窯元かまもとでは、火山灰に温泉を練り込んだ粘土で焼き物を作っている。三月のこの時期は雨が多く、かたどった物が一週間しても乾かないため、生産量が落ちるらしい。銀を混ぜた灰色の陶器が、渋くてなかなか良かったのだが、値もか

なり張るため、手頃な花瓶かびんしか買えなかった。

最後に向かったのが湯之平展望所ゆのひら。対岸の鹿児島市街は小雨に煙っていたが、山の全容がよく眺められ、大正三年に山腹から噴火した火口も確かめられた。下方には幾つか砂防ダムが設けられている。活火山である桜島山頂に、最も近づいたわけだが、まだ麓ふもとの高台といった感じである。これより上は工事関係者を除いては、立ち入り禁止となっている。

桜島の山頂だけは雲がかかっていた。ただ、朝方ユースホテルから見た噴煙は灰色だったから、この雲は火山活動とは関係ないようだ。桜島港に戻ったのは十二時半。観光バスで島内を一周するのなかなか良かった。

フェリーで市街地に渡った。史跡を見て回ろうと思った。小雨が降り出してきたので、まず、磯庭園から見ることにした。正式には仙巖園せんがんえんと言い、一六五八年（万治元まんじ）に築かれた薩摩藩の別邸である。桜島と錦江湾がよく見える。それを借景として、庭園に取り入れているわけである。

人の波を避けて奥に進むと、「迫せきこ太郎たろう」という道具があつた。これは鹿威ししおどしの原理で、水車よりも簡単な仕掛けうすで臼をつくものである。玄米の精米に使われたという。さらに進むと、はるか高みの岩山に「千尋巖せんじんがん」という文字が刻まれている。これはとても大きな岩という意味で、高さは四十メートルにも及ぶ。島津斉彬しまづなりあきらの父、斉興なりおきが作らせたもの。

巨大な鳥の檻おかりが見えてきた。中には奄美大島や徳之島に生息するルリカケスという珍鳥がいた。頭と尾は紫、背は茶、嘴は白の美しい鳥である。

尚古集成館しょうこせいせいかんは一八六五年（慶応元）に、金属加工の工場として建てられた。日本で最も古い工場建築物だという。薩摩を支配した島津氏の歴史と、近世における近代化の功績が紹介されている。金属を溶解する反射炉や石橋の模型、大砲、湿版写真機などが目についた。

島津氏は鎌倉時代からの名家めいで、西洋式技術の導入を始めたのは島津斉彬である。西郷隆盛せいせいを拔擢ぼつてきしたのも斉彬だが、斉彬の死後、実権を握った弟の久光ひさみつによつて、西郷は奄美大島、次

いで沖永良部島に島流しにされた。
薩摩藩の財政が逼迫したのは、將軍家斉の御台所に、島津重豪の娘がなつてからである。外様大名の島津家から直接輿入れてきないので、一旦近衛家の養女としてから江戸城に入った。また、將軍家定の御台所となった天璋院も、島津家から近衛家を介して輿入れしている。そのために膨大な費用がかかったのである。

普段は質素な暮らしをしていたと言うが、調度品、例えば、陶器やガラス工芸の薩摩切子などを見ると、豪華な大名の生活が目に見えかぶ。人形なども幼児ほどの大きさで、水滸伝の武將が、足柄山の金太郎みたいに可愛い顔つきで作られている。

さらに、財政逼迫に拍車をかけたのが、西洋式技術の導入であり、そのための費用は、琉球を介した密貿易の利益や、琉球から割譲した奄美に、黒糖地獄と呼ばれる重税を課しただけでは足りず、藩内の千以上の寺院を廃寺にして、仏像仏具を溶かした貴金属により、偽金を鋳造することでまかなわれた。

再びフェリーに乗って、桜島ユースホテルに戻ってきた。親しくなったスイス人の若者と、言葉や文化について話した。「とてもいい辞書なんだ」と言いながら、英語で説明された漢字辞典を見せてくれた。当時はまだスマホは登場していなかったから、外国人も紙の辞書を使っていた。

漢字辞典には、音訓引きと部首引き、総画数引きがあるが、外国人用の辞書はもっぱら総画数引きになっていた。スマホな

ら書き順など分からなくても、画面にただ書くだけで文字が認識されるのだが。当時の欧米人にとっては、漢字を調べるだけでも難行苦行だったのだ。

話は言葉から、文化の問題に移っていった。侵略された国の民衆は、ナシヨナリストになりやすい、と僕が言うと、彼は「ナシヨナリストには二つある」と説明してくれた。

「一つはネオナチや、スキンヘッドやつてるような人間。もう一つは、自分の国を愛している人間だよ。小さな国は自国を守るために、国を鎖さなければならぬ。アメリカの小さな部族なんかは、周囲から影響を受けたら、自分たちの文化を失ってしまうからね」

彼はスイス人でプロテスタントだが、自分たちがそう呼ばれ

るのを好まない。protest (抗議する) は良くないから、reformist (改革派) と呼ぶのだそうだ。カトリックに関しては批判的で、家の宗教として慣習の形で守っているに過ぎないと答えた。彼は宗教の表面的な違いより、通底するものの方に関心を持っていた。

「本当は宗教の違いなんか関係ないんだ。キリスト教でも、仏教でも、イスラム教でも」

翌朝、スイス人の彼と記念撮影した。チェックアウトすると、走って桜島港に向かった。鹿児島港に着くと、西鹿児島駅10時10分発の特急つばめに乗り込んだ。当然のことながら、当時は九州新幹線は走っていなかった。

博多到着は午後二時。新幹線で東京方面に向かうのはつらい。もう五時近い。二時間乗っけていても、まだ福山ふくやま辺りを走っている。あと三時間半も揺られているわけか。途中居眠りしたせいで、今朝けさ桜島を出てきたのさえ、過去の記憶としか感じられない。今なら飛行機しか使う気になれないが。

旅の終わりはやはり寂しい。日常とは異なるもう一人の自分が、ようやく息を始めたばかりなのに、また普段の生活に戻らなければならないからだ。旅の喜びとは、未知の土地で出会った人と、社会のしがらみにとらわれずに、ありのままの自分で接することだな。

福岡の大濠公園

福岡へ転勤した友人に会いに行った。それまでは通過しただけで、街の中を歩いたことはない。地図を見ても勝手が分からない。とりあえず、大濠公園おおほりでも見物してと言われた。どんな公園かって？ 福岡の街をニュースで中継するときによく映されるから、訪れたことはなくても、テレビでご覧になった方は多いことだろう。

東日本大震災が起きた二〇一一年（平成二三）、赴おもむいたのは三月下旬だった。昼下がりに福岡空港に着いた僕は、友人が退勤するまでの時間を潰す必要があったのだ。日は当たっていたが、風が強くてとても寒かった。池の真ん中に小島があり、

両岸から石橋を渡って向こうに渡れるようになっていた。岸にはカモメがたくさんいた。

水面に光が当たっており、またた瞬くみたいに輝いている。池にカモメがいるのにはわけがある。黒田くろだながまさ長政が福岡城を築城した時、入江だったここを外堀としたからである。同時に、黒田氏の故郷である備前国びぜんのかくに福岡にちなんで、福岡と呼ばれていたこの地を、福岡と改名したのだという。ちなみに、長政は黒田官兵衛孝高かんべえよしたかの子である。

隣の舞鶴公園まいづるには、福岡城の城跡が残っている。城の建物自体はないのだが、城門や石垣などは目にすることができ。天守閣の跡の石垣を上っていった。そこからは市街が一望できる。福岡城には天守閣はないと言われてきたが、石垣の形を見る限

り、存在したのは間違いないと思った。それが何かの理由で焼失したか、取り壊されたかしたのだろう。

福岡の名刹 東長寺

友人のマンションに泊まった翌日、福岡市内を案内してもらった。通りがかりに大きな寺院を見つけた。五重塔が二つ、ともにも明るい朱色が目に映える。実はここは地元では有名な寺院、真言宗の南岳山東長寺だった。

弘法大師空海の創建で、密教を初めて日本に伝えた寺だという。福岡藩の領主黒田家の菩提寺でもある。仏殿に安置された福岡大仏は、座像としては日本一の大きさで、釈迦如来であるという。座像の左下には、地獄・極楽めぐりと書かれた入口が見える。

中は暗かった。いきなり地獄絵が現れた。閻魔大王の裁きか

ら始まり、無間地獄や大叫喚地獄の絵と、犯した罪によつていかなる罰が与えられるかが、陰にこもった男の声で説明されている。余りに壮絶な絵なので、目を背けようにも釘付けにされてしまう。

地獄は洋の東西に存在する。ダンテの『神曲』をご覧になった方は多いだろうが、仏教の地獄も決して引けを取らない。針の山や血の池地獄だけではない。源信の『往生要集』で最も残酷なのは、溶けた銅を逆さ吊りの罪人の肛門に流し込むと、腸が焼けただれて口からたらりと垂れてくるというものである。地獄の恐ろしさを強調すればするほど、仏の救いの有難さが印象づけられるのである。

暗いトンネルをくぐり抜けると、右方に慈悲を表す金

輪が浮かび上がってきた。それを握ったところで、その先にまばゆい極楽が現れた。仏の立像が描かれており、ようやく救いの光に浸ひたされるわけである。

海の中道と志賀島

福岡に来て二日目の朝を迎えた。その日に車で向かったのは、げんかいなだ玄界灘と博多湾を隔てて延びる砂州、なかみち海の中道である。砂州といても広大な規模であり、道路やJRかしいせん香椎線が走っている。もしGoogle Earthというソフトが、パソコンにインストールされているなら、どんな地形であるか、自分の目で確かめてみるというだろう。そこを友人とドライブしたときのことである。電化されていない二両編成のディーゼルカーが、とことことどかに走っていく。住宅の姿もまばらになり、道路の両側は草原が広がり、はるかに対岸の福岡市街が望める。ひとときわ目立つのは、百メートルの福岡ポートタワーだろう。

その日は志賀島しかのしまに行くことになっていたが、通り道の海の中道海浜公園にも寄ることにした。駐車場に車を止め、入場料四百円を払った。レンタルの自転車を借りて、公園内をめぐることにしたのである。

最初の目的地は動物の森。松林の間をめぐるアスファルトの道を走って、10分近くもかかった。横浜のズーラシアは日本一の規模だというが、海浜公園は敷地だけならとんでもなく広い。徒歩で移動するなど無理な話である。自転車を降りて中に入っていく。ただし、飼われている動物の数は、それほど多くはない。

まず目を引いたのは、リスザルの群れだった。黄色い毛並みで、文字通りリスほどの小ささである。縄ばしごを伝って上手に歩き、小屋の中に入って餌えさをとる。取りこぼす物を、下でカラスが待ち構えている。小猿を追い回している奴もいる。どうやら、おつむの点では黒い鳥に軍配が上がりそうだ。動物が囚とらわれの身という感じがしないのが、この動物園の良いところだと思った。

低い柵の中に入ってしまった。放し飼いにされているのは、カピバラだった。鼠ねずみの仲間なのに、子豚ほどの大きさである。のんびり屋だが、飼育員が笹ささをまくと、ぬうつと集まってくる。存在自体がユーモラスである。毛に触るとタワシみたいに硬い。人に触られても無頓着である。愛嬌があるのか、ただの鈍感なのか？

フラミンゴは鳥だから、逃げ出さないように網の張った檻に

入れられている。橙だいだいと白の美しい姿に似合わず、けたたましく鳴き騒いでいる。ラマはアメリカらしくだとも呼ばれ、白地に茶のまだらの毛が生えている。暖かくて気持ちいいのだろう、地べたに首を付けて昼寝している。プレーリードッグは、後ろ足で立ったまま、前足で草を食べている姿が懐かしかった。実は以前、我が家やでもプレーリードッグを飼っていたのだが、数年前に死んでしまった。現在は伝染病の恐れがあるとして、輸入は禁止されているので、再び飼うことは夢のまた夢である。動物の森を出て、海岸沿いをサイクリングした。玄界灘に沿って砂浜が続いている。人影はほとんどない。ところどころ、展望台が設けられている。砂防柵の中では松の苗木が育てられていた。公園の一番端に出たところでUターンすると、博多湾

側にカモが羽を休める大池があつた。シベリアに帰るために、飛行の準備をしているのだろうか。集団で上空をぐるりと飛行すると、水上機みたいに着水を繰り返している。

海の中道公園を回っているうちに、すっかり日が傾いてしまった。志賀島に行くのは諦めかけていたのだが、車のハンドルを握った友人は乗り気である。アクセルを踏んで進むと、海の中道はどんどん狭まっていき、道幅だけが博多湾を仕切る海中道路に入ってしまった。志賀島という名前はついてはいるが、相模湾にある江ノ島みたいに、現在では地続きの陸りく繋けい島とうとなっている。

歴史に詳しい方なら、志賀島のことをご存じだろう。ここで

発見された「親魏倭王」の金印は、邪馬臺国の女王卑弥呼に対して、魏の皇帝が贈ったものとされている。ちなみに、卑弥呼は鏡を祭祀に使っていたというから、道教の影響を受けた巫女だったらしい。邪馬臺国は北九州か畿内か、という長年の論争があるが、「親魏倭王」の金印が本物だとすると、やはり北九州説の方が妥当な気がする。

もう一つ、志賀島を歴史に登場させたのは元寇である。皇帝忽必烈からの朝貢の求めを、鎌倉幕府の執権北条時宗は、従属への要求と解して拒絶した。一二七四年（文永一一）に対馬、壹岐を占領した元・高麗連合軍は、博多湾から上陸する。このときは敵方の集団戦法や、「てつはう」という火薬をつめた炸裂弾に、鎌倉武士は大いに悩まされた。一二八一年（弘安四）

の二度目の来襲では、高麗側からと旧南宋側から二手に分かれてきた。文永の役での教訓に基づいて、長い防塁が築かれたおかげで、志賀島への上陸も阻止されたという。台風による暴風雨で元軍の船の多くは沈み、捕らえられた蒙古人は斬殺され、高麗人と南宋人は奴隷にされた。それが蒙古塚として残っている。

休暇村志賀島というホテルの前に車を止めた。そこには砂浜の手前に松林が茂っている。枝の間から橙の夕陽が覗いていた。ここで写真を撮ることにした。これから10分ごとに海の色が変わっていくよ、と言いながら。

太陽は日本海に沈んでゆく。砂浜では夕陽を撮影すべく、カメラを構えて待っている人たちがいた。腕時計を見ると、ちよ

うど午後六時だった。正面には二〇〇五年（平成一七）、福岡西方沖地震で大きな被害が出た玄界島げんかいじまが望まれ、左方には九州本土が西浦崎にしゅうらさきまで包み込むように続いている。夕焼けは次第にまるやかな深みを帯びてきた。海の色は水色で、太陽から放たれた光の道が、こちらに向かつて伸びてきている。島影がシルエットになってくると、灯台の青白い明かりが点滅を始める。待っていると沈まない夕陽も、ゆつくりと赤みを増していき、肉眼で見つめられるほどに光を弱めていく。やがて、僕らもゆつくり闇に包まれていった。

太宰府天満宮に詣でる

学問の神様と言えば、天神様てんじんが有名だが、祀られているのは学者である菅原道真すがわらのみちざね。醍醐天皇だいくの時代に右大臣となったが、政敵の藤原時平ふじわらのときひらの讒言ざんげんで大宰権帥ださいのこんのそちに左遷させんされた。都落ちするときに道真が詠んだとされるのが、あの有名な短歌である。

東風吹かば 匂ひをこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ

失意のうちに配流はいりゅうされた太宰府で没した。道真の亡骸なきがらは引いていた牛車ぎっしゃが、動かなくなったところに埋葬され、建てられた

霊廟れいびやうが太宰府天満宮だざいふてんまんぐうの始まりだとされる。道真の死後、京都で時平をはじめとする政敵が次々に変死する。これを道真おんの怨念ねんのためだと恐れた朝廷は、道真を神として祀ることにした。無実の罪で死んだ怨霊おんりやうを神霊として、神格化することで怒りが鎮まると考えたのが御霊信仰ごりやうであり、天神への信仰もその一つである。

ただ、これを聞いて違和感を覚える方もおられるだろう。日本の神は死を穢れけがとして忌み遠ざけるのではないか、太宰府天満宮の社殿の下に墓所があるというのは、どうということなのだろうか。

もつとも、ここが今のような神社となったのは、明治以降のことである。それまでは安楽寺あんらくじ天満宮と呼ばれていた。江戸時

代までは神仏混淆しんぶつこんごうの寺院で、菅原道真直筆じまひつの法華経ほけきやうが祀られ、講堂、仁王門におうもん、本願寺、法華堂などを擁ようしていた。道真の墓所を囲むように仏殿が配され、その中心に天満宮が建っていたというわけである。

廃仏毀釈はいぶつきしやくで安楽寺は廃寺となり、すべての仏教施設は排除され、道真直筆の法華経も焼き捨てられた。明治以降は太宰府神社と呼ばれ、天満宮とふたび名乗れるようになったのは戦後のことである。

さて、福岡市内から西鉄天神大牟田線にしてつてんじんおおむわたせんに乗り、二日市ふつかいちで単線の太宰府線に乗り換えた。終点の太宰府駅を出て右に進むと、御神牛の像が見えてくる。菅原道真うげんが丑年うしとしであったこと、亡く

なつた遺骸いがいを牛に引かせ、動かなくなつたこの地に天満宮が造営された故事にちなんで、地べたに座り込んだ牛の姿を表している。

そこで右折し、心という字をかたどつた池を、太鼓橋で渡つて過ぎると、手水舎ちようずやの前に出る。楼門ろうもんをくぐつた先に、桃山時代に再建された本殿が建っている。檜皮葺ひわだぶきの屋根の下の柱や壁は、朱色を基調に金や五色ごしきに装飾されている。この地下に道真は埋葬されている。西洋では、王侯貴族の墓の上に教会が建っていることも珍しくないが。

お参りをした後、友人は交通安全のお守りを買つた。その後、裏の山を登つていった。そこには稲荷大明神いなりだみやうじんが祀られている。幾重にも連なる赤い鳥居を潜つていく。手を合わせた後、右下

の崖下を覗いた。小さな遊園地があつて、ジェットコースターが走っている。

天満宮の帰り道に光明禅寺こうみやうぜんじに寄つた。臨濟宗りんざいしゅうの寺院で、開基は鎌倉時代と言われる。天満宮を守ってきた菅原氏出身の鉄牛圓心てつぎゆうえんしんが創建したとのこと。ここには九州でただ一つと言われる本格的な枯山水かれざんすいがある。波紋が立つ砂は無意識の心を、島は一人ひとりの心を表している。人と人の心は無意識でつながっているのだ。

太宰府駅に戻る参道に、太宰府天満宮の名物梅ヶ枝餅うめがえもちを売る茶店「かきの家」がある。温かい物を食べることにした。茶席に座ると、店の人がお茶を持ってきてくれた。外がパリパリの餅で小倉あんが入っている。茶席の前には小石で梅の花の模様

がかたどられている。

阿蘇から高千穂峽へ

熊本を大地震が襲う五年ほど前の秋、福岡から友人の車で阿蘇を目指した。のろのろの台風が四国に達していたため、天候は思わしくなかったのだが。十時頃に福岡を出て、太宰府までは一般道を走り、その先で九州自動車道に入った。

阿蘇ファームランドに着いたのは、午後二時頃。ランチバイキングと入浴のセットで、二千円弱だった。泉質は鉄分が多いのか、茶色く錆びたような色をしている。寝ころび湯はぬるくてくつろげた。

雨がかなり降ってきた。露天風呂ではくつろげない。印象的だったのは、ワインの湯と川芎せんきゅうの湯だ。前者は赤ワインの色、

後者は臙脂色えんじで漢方薬特有の匂いがする。ラベンダーの湯は低温で紫色。ヒーリング効果がある。カモミールの湯は黄色く、お茶で飲む場合と違って心地よい。

南阿蘇村にあるグリーンピア南阿蘇に向かった。門をくぐると、車のナビから道が消えた。山の上まで道路は続いているが、私道なので地図に見えない。

チェックインした。二階のバリアフリーの部屋に案内された。ここしか空いていなかったからだが、車椅子の老人でも過ごしやすいようにと、広い空間にベッドが三つある。ソファの前には巨大な一枚の窓ガラスがあり、天気が好ければ阿蘇五山の絶景が見られるはずだった。しかし、山々は雲に覆い隠され、

ふもとの町も霏もやに包まれている。

夕食は午後七時から。オードブルの後、馬刺しや、ビーフと野菜の蒸し煮、桃のスープなどが出た。桃のスープはフルーティーで、「デザートのようにだ」と友人が言っていた。そのほか、ハーブチーズやレバーペーストなどもあった。どれも上品でおいしい。

入浴時間は夜十一時までだった。急いで大浴場へと向かった。温泉の色は阿蘇ファームランドと同じように、茶色っぽく錆びたような色。内風呂は二槽あり、右はぬるく左は熱い。露天風呂は外気がうすら寒いので、ぬるめとなっていた。

翌朝は八時過ぎに起床。急いで大浴場で朝風呂に入る。阿蘇

山は依然として雲に覆われている。朝食はおかゆとさまざまな漬げ物、筑前煮、甘めの味噌汁、フルーツパンやくるみパンなどを、バイキング形式で食べた。

チェックアウトは十時過ぎに。少し雲が切れたけれど、天気予報では阿蘇は一日中曇りとなっていた。期待はできないので、もし天気が悪かったら、阿蘇火山博物館で大パノラマの映画を見ようと提案した。実際に上っていくと、小雨が降り出したり、日が差してきたり、空模様は目まぐるしく変化した。

「本当は素晴らしい光景が下界に広がっているんだよ」と、僕は十五年前に訪れたことを思い出しながら言った。

草千里に出たけれども、また雨が降り出した。とりあえず火山博物館に入り、阿蘇生成のドラマを、大パノラマの映画で見

た。阿蘇の旧火山が噴出物のために陥没し、巨大なカルデラを形作った。そこに雨水がたまってカルデラ湖が生まれた。ふたび火山活動が活発化し、湖の水は流れ下り、現在の五山が隆起したのだという。映画ではそのほか、阿蘇の祭や自然に生きる動植物が紹介されていた。

火山博物館を出ると、さっきまで降っていた雨がやみ、手前の草千里が霧の中から現れていた。すかさず彼と写真を撮った。前回来たときは早春だったので、枯草千里だったが、今回は青々とした草千里が泥濘ぬかるみとなり、馬の姿も見えなかった。なかなかうまくいかないものだ。

また雨が降り出すかもしれない。そこで阿蘇はこのぐら

いにして、高千穂峡まで足を伸ばすことになった。車で山道を上っていくと、雲はますます厚くなっていった。つい、うとうとしてしまったが、「高千穂駅に着いたよ」という友人の声。

高森は通過してしまったのだろうか。でも、何だかおかしい。レールと高千穂鉄道の車両が見えるから、間違えてもしかたないのだが、ここは高千穂鉄道（旧高千穂線）と南阿蘇鉄道（旧高森線）をつなぐ九州縦断鉄道のルートで、トンネルを一部掘り進めながら、大量の出水しゅつすいという難工事のまま放置された区間に設置された「トンネルの駅」だった。

ここは貫通しなかったトンネルの、高森側の出口だったというわけだ。とりあえず、中を見学してみることにした。掘り進められた部分が、焼酎を醸造する酒蔵として利用されていた。

アルコールの匂いが漂う空間には、酒樽が棚に横積みになされていた。彼方まで伸びるトンネルに、ついに列車が通ることにはなかった。

外に引き返すことにした。高千穂鉄道の車両は、以前は食堂として使っていたらしいが、今は見学できるようになっている。ドアの前に立つと自動ドアが開いて、中に入ることができた。保存状態はかなりいい。車内には花が飾られ、運転席も当時のままだから、現役の車両と見紛みまがうばかりだった。

なぜ高千穂鉄道の車両が保存されているかって？ 二〇〇五年（平成一七）の台風で五ヶ瀬川の橋梁が流され、運休のまま廃止されてしまったからだ。友人の車に戻って、終点だった高千穂駅に行ってみることにした。駅は谷にあるので、階段を下

りていった。駅舎の中には職員がいて、土産みやげなどを売っている。見るとエンジンをつけたトロッコで、天岩戸駅まで走れるらしい。

誰が運転するのか、料金が片道なのか往復なのかも分からない。受付の女性に訊きいてみると、運転は男性の職員が行い、料金は入場料込みの往復で八百円だそうです。

トロッコを改造したスーパーカートは、簡易座席がつけられているだけで、線路から数十センチの高さしかない。こんな低い高さで普通の線路を走るのは初めてである。

エンジンがかかって煙が出る。いよいよ出発だ。先頭にカメラを据えて、ビデオで撮影することにした。予想していたより

速い。かなりスピードが出て、まともに風を浴びている。エンジンの振動が足に伝わって、マッサージされてるみたいだ。雑草が生い茂った上を、車体は駆け抜けていく。二人とも童心に戻って、思わず叫び声を上げてしまう。

トンネルに入ると、国鉄時代に掘られたものなので、明かりがないだけでなく、地下水が降りかかってくる。真っ暗な中をエンジン音を響かせて進む。探検家にもなった気分である。一駅間といっても、片道10分近くかかった。

天岩戸駅が見えてきた。前方の高架橋の手前に金網が張ってあり、これ以上は進めないようになってる。それを見て改めて、高千穂鉄道は廃止されたんだと感じた。スーパーカートは、かつての駅で停止した。運転手の男性が、ホームに上がってく

ださいと言った。

高千穂橋梁は錆びていた。駅の入口はふさがれ、看板も薄汚れて、まさしく廃墟はいきょのようになっていた。十五年ほど前のこと、谷底にあるユースホテルに泊まった。ホームからペアレントのおばさんに、着いたよと叫んだことを思い出した。

「目輝かせてるけど、うれしそうだね」

僕がかつての出来事を、早口で友人に話した。東洋一の高さを誇る鉄橋から、谷を見下ろしたり、下から天上を進む列車を仰いだりしたことなどを。その鉄橋も錆び果てて、本物のディゼルカーが走ったら、車両の重みに耐えられるかも心もとない。

余りの変わりように、もの悲しい気分になってしまった。こ

のように放置されてるということは、高千穂鉄道が復活することはないのだろう。ただ、現在では、風が強くない日に限って、スパーカートで橋の上まで移動できるらしい。川底を見下ろしてはじめて、東洋一の高さは実感できるわけだから。

職員に促されて、僕らは車両に乗り込んだ。元来た線路を、スピードを上げて逆行していく。最初に得られた感動は、すでに失われていた。以前に乗った天岩戸く延岡間に加えて、これで高千穂鉄道を走破したことになる。

高千穂駅に戻ってきた。車で谷の中ほどまで下っていく。以前徒歩でここに来たとき、谷底から地上までの高低差を見て、途方に暮れてしまったのを覚えている。無料駐車場は満車だっ

たので、有料駐車場に車を置き、階段を下りていった。友人は初めての体験なので、カメラを構えながら興奮気味だった。何度見ても素晴らしいのだが、本当の醍醐味だいごみは谷川をボートで進むことだ。

この高千穂峡は、阿蘇の古火山の溶岩が五ヶ瀬川に流れ込み、急激に冷やされたことから柱状の岩となったという。晴れていて、滝の水が日光を浴びて、薄暗い谷川に虹がかかったところが美しい。本当は今日もボートに乗りたかったのだが、友人は転覆するのではと怖がっていた。石橋を叩いても渡らないところがあるのだ。

遅い昼食は茶屋でとることにした。半分に割った竹を店内に渡して、流しそうめんをやっている。しかし、僕は宮崎の郷土

料理、冷や汁が食べたくなった。豆腐の味噌汁を冷やして、そこに焼き魚と胡瓜、胡麻、薬味を入れたもの。

茶屋の前にあるのはおのころ池である。国生み神話で、伊弉イザナ諾尊ノミコト、伊弉冉尊イザナミノミコトが最初に生み出したとされる島が、池の中央に立っている。池にはチョウザメみたいに口の尖った魚が泳いでいる。大きさからすると鯉なのだろうが。

高千穂峡に足を伸ばした後、高森からの帰り道は、根子岳ねこだけの東を回るコースを選んだ。ところが、とんだ田舎道で一方通行ほどの道幅しかない。蛇のようにくねくねした急カーブが続く。阿蘇駅前を過ぎてからも山道で、すでに薄暗くなっていたから、前方を行く車のライトに先導される形となった。

ひた 日田で夕食をとり、福岡に戻ったのは、夜の十一時だった。早いもので、明日は帰郷しなければいけないが、夜、福岡空港を飛び立つまでには時間がある。旅行のメモを取りながら、何をするか友人と話し合った。

能古島ってどこの島？

ようやく天候が回復した。疲れがたまっていて遠出はしたくないので、能古島のこのしまに行くのは次回にしたかったのだが、晴れ上がった空を見た友人は乗り気だった。

朝食の準備をしていなかったの、天神に出ることにした。ただ、十一時前だったから、開いている店はあまりない。甘くてしょっぱいカツ丼へきえきに辟易へきえきした後、地下鉄の空港線に乗ってめいのはま姪浜めいのはまに向かった。そこから筑肥線ちくひせんに接続するわけだが、この筑肥線は、空港線の開通に伴い、併行する博多く姪浜間が廃止されたという経緯がある。

問題の能古島だが、福岡市民でなければ知らないかもしれないな

い。博多湾に浮かぶ小島で、古代には防人さきもりが守り、元寇げんこうの時には戦場となった。江戸時代には馬が飼育され、鹿狩りなども行われた。現在は福岡市西区に属し、キャンプ場や海水浴場が置かれていているという。

姪浜駅に着いた。能古島への渡船場とせんば行きのバスに乗る。乗車時間は10分のはずだが、かなりかかったように思う。そこからカーフェリーに乗ったのだが、博多湾の海水は茶色く濁り、磯の香りに下水の臭いが混じっていた。

フェリーの甲板かんばんからは、志賀島と海の中道が見える。能古島は山が海から顔を出しているだけの、何の変哲もない島だった。港には観光案内と磯料理の食堂があるくらい。この島の見どころ

ろは、アイランドパークである。ユスモスの花が咲き乱れ、子供用の遊具やアスレチック、運動場、ミニ動物園などがある。陶芸や絵付けの体験もできるらしい。

とりあえず、展望台の入口までバスに乗った。山道をたどって丘の頂いただきに着いた。そこからは福岡市街、海の中道、志賀島などが望める。僕はその年の春に来たとき、海の中道でサイクリングしたり、動物園でカピバラと遊んだことを思い出した。本心を言えば、今回もあの道を走りたかった。

外海の方に見えるのは、玄界島である。この島は半農半漁で、かつては福岡藩の流刑地るけいちだった。段々畑が広がるものの、道路は海岸沿いに延びるばかりで、島の中央は森林で占められている。以前、志賀島を訪れた際、夕闇が迫りつつある中、灯台の

光が残照の玄界灘にとり出したので覚えている。

展望台を出た後は、アイランドパークに寄ることもなく、午後三時の船で能古島を後にしたのだった。海水浴をするには水が冷たく、ブラックバイトに追われる学生には、キャンプをする余裕もない。島を歩いていても、ほとんど人影が見当たらない。九月の能古島は、観光とは縁遠い島だった。

長崎の爆心地

翌年の春、またもや福岡の友人を訪ねた。一泊した次の朝、博多駅から特急かもめに乗った。新幹線のように白くて流線型の車体である。車内は飛行機みたいな収納棚が座席上にあり、座席は黒い革のシート、座席と座席の間もゆったりしている。ビュッフェみたいにな立ち席もある。

日が差してきた。有明海ありあけかいが見えてくる。海苔のりひびが浅瀬に、縦横に並べられている。諫早湾いさはやわんの干拓事業かんたくで、有明海が汚れ、海苔から香りが抜けてしまったことなどを話した。長崎本線は一部を除いて単線である。カーブが多い。そのため、計画されている長崎新幹線は、在来線を利用せずに新線を建設すること

になるという。

浦上^{うらかみ}を過ぎると長いトンネルに入り、突然猛スピードを出す。次の停車駅は終点の長崎駅である。到着したのは十二時頃だった。

湾に面した細長い町には、路面電車の複数の路線が伸びていた。原爆爆心地は長崎の中心部よりも、中島川をさかのぼった浦上駅に近い。中心には黒い石柱が立っており、その上空で一九四五年（昭和二十）八月九日午前十一時二分、プルトニウム型の原子爆弾がわずかの雲間を縫って投下された。

半径五百メートル以内にいた人は、ほぼ全員死亡した。二千年ほどの炎で焼き尽くされ、長崎駅あたりまでは火災で焼け野

原になった。中島川は死体で埋め尽くされ、水が飲みたい、水が飲みたいと言いながら倒れていった人も多い。爆風で飛び散った陶磁器が、破片となって樹木に突き刺さったりした。被爆当時の地層も保存されている。粉々になったものが一緒くたに埋まっている。浦上天主堂も大破し、残された煉瓦^{れんが}造の柱の一部が、この爆心地に移設されている。ここを訪れる西洋人は多い。長崎は歴史のある町だから、観光とともに世界の平和を願って訪れるのだろう。

原爆資料館は屋外の階段を上っていった先にある。建物のスロープを下りていくと、入口は一階にあった。原爆以前の長崎の町を写した写真。古い町並みや、国威^{こくい}発揚^{はつやう}を促す神社の垂れ幕。軍事教練にいそしむ青年の姿。焼けた衣服や炭化した弁当

箱のご飯、ケロイド状にただれた顔と上半身の老人。地べたに転がる真っ黒い死体、丸木位里、俊夫妻の「原爆の凶」。証言する女性のビデオ。何の薬もなく、死んだ人たちの顔に布をかぶせていく看護婦の話。ここで被爆したのは日本人だけではない。最も多かった外地出身者は、造船所などで働かされていた朝鮮人だった。

地獄と化した町の中では、朝鮮人の死体は誰も引き取ろうとしない。カラスがやってきて、目玉や死肉を食らっていく。それを放置する日本人。死んでもからも朝鮮人は差別されていたという。その展示を巡りながら、友人も僕も言葉を失っていった。

生前のロブ・グリエ Robbe-Grillet が、フランスのペンクラブの代表として来日し、大江健三郎と対談した時のことだ。大江

が原爆の悲惨さと平和の尊さを説いたのに対し、ロブ・グリエは世界の悲惨を原爆に集約して語る姿勢を批判していた。確かに、悲惨なことは原爆以外にもたくさんある。しかし、原爆の恐ろしさを知らない人間は、世界にはまだたくさんいるだろう。

飢えた人民を放置して、核やミサイル開発に執念を抱いているのが、日本人に次いで多く原爆で死んだ民族であるのは歴史の皮肉だ。すでに核兵器を保有している国や、核兵器の開発に躍起となった国を指導者を、広島か長崎に招いて、核兵器の恐ろしさを再認識してもらいたい。

長崎のグラバー邸

路面電車の石橋行きに乗り、終点で下車する。ケールカーのような斜面を上るエレベーターがある。四階は住宅地で、五階までケールに引かれ、一本のレールの上を滑っていく。上りきったところで、さらに垂直のエレベーターに乗る。

グラバー園はイギリスの貿易商、グラバーの邸宅だった場所である。時代劇のファンなら、土佐藩を脱藩した坂本龍馬が、グラバーから資金や武器を調達された話をご存じだろう。実は背後にはユダヤの豪商、ロスチャイルド家があり、一方、幕府を援助したフランスの背後にもロスチャイルド家の分家があった。日本国内で内戦を起こして、薩長が勝つても幕府が勝つ

ても、一儲けできると皮算用していたのだ。グラバーの屋敷には天井に秘密部屋があり、そこに坂本龍馬ら幕末の志士をかくまっていたと言われる。

ところが、内戦を恐れた坂本龍馬が奔走し、土佐藩主山内容堂ようどうを通して、徳川慶喜とくがわよしのぶに大政奉還たいせいほうかんを進言したため、戊辰戦ぼしんせん争などを除けば、全土が焦土しょうどと化すことは免れた。当てが外れたグラバー商会は倒産し、内戦回避に尽力した龍馬は命を落とすことになった。

大河ドラマではそうした真相に触れないから、憂国の下級武士が団結して幕府を倒した美談に仕立て上げている。だが、明治時代の人間は明治維新の実態を知っていたから、夏目漱石も「維新」などとは言わず、「瓦解がかい」と呼んでいる。幕府の崩壊

とともに、日本がイギリスの属国のようになってしまったからだろう。

西洋式の館の間を縫っていくと、長崎を展望する高台に出る。長崎湾が手前に横たわっており、対岸の山には電波塔が建っている。右方は中島川の河口で、左方の狭い湾の出口には、横浜のベイブリッジを思わせる吊り橋、女神大橋が架かっている。丸い庭園には中央にチューリップが、その周りにはスマイレが咲き乱れている。坂道を一九世紀のイギリス婦人の衣装を着た女性が下りていく。どうやら貸衣装をやっているらしい。

グラバー園を出て坂道を下っていく。みやげ物屋でオルゴ

ルを売っていた。しゃれていたが高価なので、とても買う気にはならない。この辺りでも角煮バーガーを売っている。

大浦天主堂の下に出た。石橋からエレベーターでグラバー園に行けることを知らない人は、ご苦労にもここから坂道を上っていくことになる。年末に来た友人もそうだったらしい。階段を見上げると、天主堂の白亜の堂宇が拝める。

帰路は徒歩で長崎駅方面に向かう。右方にゆるいカーブが続く石畳のオランダ坂、その途中まで上ってみた。長崎の名所として百科事典などで紹介されている。唐人屋敷には多少建物が残っているらしいが、中国人は新地中華街に移ってしまった。その中華街だが、横浜のものをイメージしたら、失望するに違いない。立派な門はあるものの、十字の通りにまばらに中

華料理店やみやげ物店が並ぶだけで、土曜日だというのに人影もまばらで、お客が一人も入っていない店も少なくなない。

眼鏡橋にも足を運んだ。「ザボンみたいな朝日だな、ここは長崎眼鏡橋」と、倍賞千恵子が歌っていたのを覚えている。この石橋は寛永かんえいの頃、中国僧によって建てられた橋で、長崎のシンボルの一つだったが、一昔前の長崎水害で破壊され、現在あるのは再建されたものである。しかし、それに関する記述は看板にはなかった。

長崎の出島

長崎を訪れた理由の一つは、鎖国の時代に唯一、ヨーロッパに門戸もんこを開いていた出島でじまを見ることだった。幕府がポルトガル人の居留地として、一六三四（寛永十一）年に長崎の町人に作らせ、ポルトガル人が追放されてからは、平戸島にいたオランダ人を移住させた出島は、四千坪つば程度の小島だった。出入りは厳しく制限されていたから、一部の役人以外はなかなか中の様子を知ることができなかった。とはいっても、妻子を連れてこれられなかったオランダ人のために、日本人の女中や遊女は出入りしていたのだが。

カトリックの布教を行うポルトガルと違って、プロテスタン

トのオランダは、布教を行わずに貿易をもっぱら行っていた。オランダはライバルのポルトガルを追い落とし、南蛮貿易をやめた日本に代わって、東南アジアの市場での利益を独占しようとした。島原の乱の時、幕府に協力して海上から砲撃したのもオランダである。将軍徳川吉宗はキリスト教以外の洋書の輸入を許可し、ここに蘭学が発達して、日本の近代化の準備がなされたというのは、歴史が語る事実である。

現在の出島を訪れるには、長崎駅から路面電車に乗るといい。当時の建物は残ってはおらず、目にする事ができる物といったら、観光用に再建された館ばかりである。日本風の屋根や壁に、洋風のライトグリーンやかたの窓枠がはまった和洋折衷の建築。

前には笠をかぶり、大刀たちをさした侍姿の役人が立っている。一階はもっぱら倉庫に使われており、貿易品の重さを量る分銅ぶんどうが置かれていた。当時の日本からは、銀や銅、陶磁器などが輸出され、砂糖、織物、薬品、医療器具、書物などが輸入されていた。オランダ船が直接、出島に接岸したわけではなく、沖に停泊した船との間をはしけが往来して、人や物を運んでいたという。

ただし、出島の復元は進行中であり、建物の一部は建設中だった。再現された部屋の一つは、図書室という説明がされていたが、書物は何も置かれていなかった。本来は洋書の百科事典が置かれていたはずなのだが。寝室の中には、ベッドも何もない空き部屋もあった。当時の全貌が姿を現すのは、まだ相当先

のことになりそうである。

一方、当時用いられていた服や食器類などは、かなり保存さ
れていた。出土した指輪や陶磁器の破片も展示されている。埋
め立ての際に使われた杭や石などから、用いられた工法なども
明らかになっている。僕が最も興味を持ったのは、江戸時代の
不定時法のために改造された時計である。季節によって昼と夜
の長さが異なるので、それに合わせて、時計の速さを変える必
要があり、西洋時計をそのまま使うわけにはいかず、独特の工夫
がほどこされていたのである。また、半信半疑で見っていたのは、
当時の地震予知器である。馬蹄形ばていけいの磁石にぶら下がるぎりぎり
の重りが吊され、地磁気の変化で地面に落ちるといふ仕組みで
ある。

出島といえば、扇形の埋立地を思い浮かべる方も多いだろう
が、明治時代に周囲が陸地となって、オランダ船からはしけ
が行き来した岸壁の前の海も、今は路面電車が走る大通りとな
っている。当時の風景を外観から偲しのぶことは、もはやできない
のである。東海道の起点だった日本橋が、高速道路の橋架きょうかの下
になってしまったように。陸地に囲まれてしまった出島を見
て、古い文化を顧みずに近代化を急いだ日本の、ゆとりのない
味気なさを感じずにはいられなかった。

長崎の伊王島

長崎港から高速船で二十分足らずの沖に、伊王島いおうじまという小島がある。幕末の一八六六年（慶応二）に設置された灯台があり、戦中から戦後にかけては、海底炭田の採掘が行われた。閉山後は観光客の受け入れに熱心で、長崎港から島への往復の航路と、島内の温泉の入湯料を含めて、千円足らずという格安で、長崎市内の観光客を呼び込むことに力を入れている。二〇一一年（平成二三）には、伊王島大橋で九州と地続きになったが、遠回りのため車でも三十分はかかってしまう。

当日は春のよく晴れた日だったが、港を出て女神大橋を抜けると、いきなり波風が強くなり、うねりも高くなってきた。前

方のガラス窓にしぶきがかかる。高波のために、船は左右に揺れながら、波を乗り越えジャンプする。スリルがある程度だったが、船内には女性や子供たちの叫び声が響いた。伊王島の港に入ると、風は強かったものの、波は静かになった。

もし電動自転車借りられるようだったら、高台の灯台まで上っていくといい。長崎市街を遠くに望めるはずである。その日はママチャリしか残っておらず、左方の海岸沿いを走ることにした。変速機がついていないせいで、坂道だとほとんどペダルに力が入らない。伊王島大橋の橋脚の下を抜けると、沖に海原うなほらが広がっていた。うねりが一気に崩れると、八方にしぶきをまき散らす。平坦な小島、同じく炭鉱で栄えた高島が見える。その手前の波に洗われた岩場に、小さな灯台が建っている。納沙のさつ

布岬ふみさきの先にある貝殻島かいがらしまを連想させた。

伊王島の温泉は、湯の温度が41度でちょうどいいが、塩水の湯であるために、ひげの剃り跡がひりひりする。露天風呂は真冬のような北風で寒かった。ヨモギ湯や打たせ湯で旅の疲れを癒いした。この島を訪れる観光客の大半は、この温泉が目当てなのである。

ところで、この伊王島には俊寛僧都しゆんかんそうずの墓がある。『平家物語』を読んだ方ならご存じだと思いが、鹿ヶ谷しかがたにの山荘で平氏討伐とうぼつを謀はかったことが露見ろけんし、鬼界ヶ島きかいに流刑となり、共謀者が許されながらも、自分にだけは赦免状しゃめんじょうが届かず、船にとりつき嘆き叫んだ僧侶である。その鬼界ヶ島がどこかは諸説があるが、薩摩硫黄島まいわうじまだろうという説が有力である。発音が同じ長崎の伊王

島にも、俊寛の墓が建てられた。同音といえは、奄美の喜界島きかいじまにも俊寛の墓がある。終焉しゆうえんの地が果たして、薩摩硫黄島か伊王島か、はたまた喜界島かははっきりしていない。

『平家物語』によれば、島に残された俊寛は、田畑もない島で硫黄を集めて、それを商人に売って生きながらえていたという。主人を慕って有王ありおうが島を訪れた時、俊寛は乞食こじきのような姿をしており、やがて食を絶って阿弥陀仏の名号を唱え、二十三日目には息を引き取ったという。有王は俊寛の庵を壊して火葬にし、遺骨を高野山の奥の院に納めたという。この内容が正しければ、鬼界ヶ島は薩摩硫黄島で、墓は島には存在しないことになる。

日本の歴史学者は、怪しげな民間伝承など相手にしない。しかし、真実がどこにあるかは一般の人間には、あまり関係がな

いだろう。疑わしい墓を暴くなど、無粋なことはしない方がいい。長崎の伊王島で俊寛が死んだかもしれないと夢想することも、旅情を味わう楽しみの一つである。

天草五橋に来てみれば

早春のまだ寒さが残る中、僕は友人の車で九州自動車道を、南に向かってひた走っていた。昼食は北熊本のサービスエリアでとった。みやげ物屋をのぞくと、どこもかしこも、熊本県のゆるキャラ、くまモンのデザインがついた物ばかりである。今では海外にも知られたくまモンだが、生誕の地に乗り込んだわけだから、当然なのかもしれない。

今回の旅の目的は、別にくまモンに会うことではない。独特の歴史と風土を持つ天草諸島を、一度訪れておきたいと思ったのである。くまモンが店先に立つ食堂で、だご汁定食をとった。これは九州の郷土料理で、醤油味のだしが効いた汁に、すいと

んや鶏肉、人参、大根、牛蒡ごぼうなどが入っている。素朴だがうまみのある懐かしい味がする。

松橋まつばせから一般道に降りた。宇土半島を進み、三角駅みすみの前で休憩した。九州の地名はとにかく読みにくい。地元の人でなければ、なかなか正確には読めない。黄土色の駅舎を撮影した後、近くの市場で「まくらぎ」という、黒砂糖に小麦粉、落花生らっかせいの入った軟らかな菓子を買って食べる。これまた癖になる。宇土半島は黒砂糖が栽培可能なほど、温暖な地なのである。

三角駅から半島の先端に進むと、もう天草の最初の島、大矢野島のじまに架かる橋が見える。NHKテレビ「みんなの歌」の「天草五橋に来てみれば、異郷の鐘が聞こゆるばい」という歌詞を

思い出した。ここは日本でも有数の、カトリック信者が多い地方である。ただし、教会の鐘の音は聞こえたとしても、宇土半島から渡る場合には、天草の島々をつなぐ橋を見渡すことができない。

最初の島、大矢野島に渡った。ここは天草諸島の中では中規模の大きさだが、島原・天草の乱の首謀者、天草四郎時貞あまくさしろうときさだの出生地とされている。ここには「天草四郎メモリアルホール」がある。それに関しては、あとで「天草キリシタン館」や、当時の史跡とともに紹介することにする。

目指すのは天草下島しもしまの下田温泉である。いくつもの小島を抜けて、天草上島かみしまも縦断しなければならぬ。トンネルがいくつもあり、整備された道を突き抜けるので、いまだに九州本土に

いる感じがする。

海沿いの道を選んだのち、最後の橋を抜けると、天草下島の中心、本渡の町並みが見える。そこからは山道を進み、亀川ダムの横を抜けて、県道24号線をひた走る。他の車はほとんど見かけない。下田温泉に着いたのは、午後六時前である。熊本から二時間かかると聞いていたが、有料道路を避けたこともあって、三十分以上余計にかかっていた。雲が広がっていたので、東シナ海の素晴らしい夕日は見られない。

下田温泉に宿泊した。泉質は透明で弱アルカリ性、肌に優しい感じで、お湯の温度がちょうど良く、いつまでも入っていられそうだった。湧出時の温度は51度だが、適温まで下がってい

るのだろう。露天風呂も大きくはないが、外の涼気を浴びながらが心地よい。川向こうの道路から覗かれてしまいそうだが。

午後七時になって、部屋に郷土料理が運ばれてきた。キビナゴの刺身やウツボの酢味噌和え、ナマコの酢の物、ナマコはタコに似た味だが、軟骨を噛んでいるような歯応えがある。海老の塩焼き、海老と野菜の焼き物、アサリのお吸物など。僕は冷酒を飲んで、いい気持ちになっていた。

翌朝はよく晴れていた。朝風呂に入った後、宴会場で朝食をとった。鰯の干物や筍の煮付け、味噌汁、梅干し、ヨーグルトなどが並べられていた。温泉水で入れたコーヒーは、ブラツクのままでもクリーミーで、体の中まですべすべになりそうだった。このコーヒーを二杯飲んだのだが、便通が良くなった。

天草の海にいるか？

動物と子供の交流を扱ったドラマと言えば、一九六〇年代生まれの世代にとつて、『名犬ラッシー』とともに、『わんぱくフリッパー』が忘れがたい。イルカは友達という意識を、世界中の人々の心に刻み込んだと思われる。

僕は以前、小笠原諸島に旅をしたとき、ドルフィン・スイムを体験した。リュック・ベッソン Luc Besson 監督の映画『グラン・ブルー』Le Grand bleu や『アトランティス』Atlantis で、海洋の神秘に魅せられたことが、イルカとともに泳ぎたいという思いを抱かせたのである。その時の素晴らしい体験は、以前『君のまだ見ぬ OGASAWARA』という名のエッセイにまとめ

て、[iTunes Store の Podcast](#) に載せているので、ぜひご覧いただきたい。

ただ、友人は野生のイルカを見たことがなく、自分も小笠原や島原、能登とともに、日本有数のイルカ・ウオッチングの海に大いに惹かれていた。天草下島の沖には、ミナミハンドウイルカがおよそ二百頭棲みついているという。

下田温泉を車で出た後、途中で富岡城に寄った。ここは島原の乱で激戦地となった史跡である。急いで城跡を巡ると、通詞島へと急いだ。十一時半に予約が取ってあった。

白い橋で狭い海峡を渡ると、漁港の前にイルカクラブの事務所があった。まだ時間があったので、受付のおじさんに岸壁に

連れていってもらった。透明な港の海底に、青い熱帯魚がいるというのだが、水面が揺らいでいてなかなか見つけれない。

おじさんの車に先導されて、通詞島つうじしまを出て元の対岸の港に導かれた。待合室に入ると、四十歳前後のガイドの男性が、イルカについて説明していた。イルカは漁師の嫌われ者で、魚を食い散らすと思われる。老岐で一千頭ものイルカが撲殺され、日本が世界中から目の敵かたきにされた話を、今の若者は知っているだろうか。

女優の岸恵子きしけいこは「ああ西洋、人情うすき紙風船」の中で、日本人を野蛮人のように罵る西洋の声に対し、他人への情の深さの点から日本人を擁護ようごし、動物愛護ばかり説くのは、西洋人の人間関係が冷たいからだとしている。そのエッセイの中で、

日本人を罵倒ばとうしているのが、実はフランス人の夫との間に生まれた愛娘まなむすめだったというのが、筆者のただならぬ立場を際立たせていた。

イルカを目の敵にしているのは、日本の漁師だけではないと、ガイドは話していた。イルカが増えると、漁獲高が減ると信じているのは、海で漁をしている人間にとっては、共通の認識と言っている。漁師が棍棒こんぼうでイルカを殴らないと、漁師自身が「なんばしよつと」と、殴られてしまうらしい。

ただし、通説だからといって、いつも正しいとは限らない。イルカの中には人間になついで、口にくわえた魚を甲板に上げたり、漁師が網を海中に投じると、仲間と一緒に魚を追い込んでくれたりする個体もいる。ただし、そんな話を漁師仲間にし

ようなものなら、嘘つきか頭がいかれていると思われてしまうという。

ガイドに導かれて、白い船体に乗りに込んだ。座席に置かれた救命胴衣を身につける。出港すると猛スピードで、イルカが出現する海域に向かう。十時半の航海では少ししか見られなかったらしい。イルカは風を好むから、多少波がある日の方が、多くの出会いがある可能性が高い。

イルカのいる海域に到着した。通詞島の白い橋が、はるか彼方に見える沖である。うねりがあつて船が大きく揺れるので、手すりがない船の後部には行かないように、と指示される。

波間に数頭の群れが見える。子連れの母イルカは警戒心が強

く、船で近づくとすぐに潜ってしまう。とはいえ、スクリューの音でイルカ・ウォッチングの船と、一般の漁船を聞き分けている。呼吸をするために水面に、定期的に顔を出しているのは、ある程度なついている証拠なのだという。

ただし、天草のイルカが人間にすつかり心を許しているわけではない。小笠原のイルカのように、船の横に全身をさらしたり、歓声に応じてジャンプしたりしない。だからもっぱら見えるのは、背中と背びればかりである。

それはなぜか。小笠原のように、ここはイルカの楽園というわけではないからだ。漁師の多くに目の敵にされているから、うっかり見知らぬ船に近づこうものなら、船縁から棍棒が飛び出してくる。

本当のこと言えば、漁師もイルカのおかげを被^{こうむ}っていると、ガイドは主張していた。天草の沖にはホオジロザメなどの「人食いザメ」が生息しているが、イルカは協力してサメを追い払ってくれている。もしイルカがいなければ、漁師がサメに襲われる確率が高いのだと。

曰^{いわ}く付きの環境保護団体が、片言の日本語で、ここに乗り込んできたことがあるそうだ。その際にイルカ・ウオッチングで、イルカが傷ついていないかと、そのことばかり気にしていたという。うまくあしらわないと、船に放水されてしまう。彼らは人間同士のことより、動物の方がよっぽど重要なのだらうと思っただ。

キリシタンの島天草

キリスト教をテーマにした日本の作品といったら、遠藤周作^{えんどうしゅうさく}の『沈黙』を思い浮かべる方が多いだろう。キリスト教が禁止されている日本に、福音^{ふくいん}をもたらすことが、結果的に農民を苦しませてしまっている矛盾や、「踏絵」でキリストの像を踏むことは、西洋世界ではあり得ないことでも、人々の罪を背負って死んだキリスト自身なら、理解してくれるはずだという思想は、キリスト教の意味を根底から考え尽くした作者だからこそ、到達できたものだろう。

遠藤周作の思想の本質に、短編ながら触れさせてくれるのが「最後の殉^{じゆんきやうしや}教者」である。これは開国によって、西洋人のた

めに教会が建てられ始めても、依然として日本人にキリスト教が禁止されていた頃の長崎での物語である。その中で何度も転んでいる（棄教している）喜助という男に、信者が励ましの言葉をかける場面が印象的である。

にぶい鍵の音と、喜助のよろめく蹠音あしおととをききながら甚三郎は、「喜助」とひくい声をかけた。「苦しければころんで、ええんじゃぞ。ころんで、ええんじゃぞ。お前がここに戻ってきただけでゼズさまは悦んどられる。悦んどられる」

僕が今回天草の島々を訪れた目的の一つは、九州に根づいたキリスト教について、史跡を巡りながら肌で感じることだった。

最初に巡ったのは、下田温泉の北、通詞島の手前に位置する富岡城である。

そこは天草下島の西海岸の岬にある。江戸時代初期の天草は、唐津藩主寺沢堅高てらさわかたがの領地だった。島原・天草の乱は最初、松倉勝家かついえの支配する島原半島で起こり、ついで天草にも飛び火した。富岡城を攻撃する一揆軍いっぎきに対し、寺沢堅高は必死に防戦した。再現された城の石垣は、当時の壁や廃城になって崩された部分まつくらが、修復されて一つになっているが、継ぎ目は石の色の違いで見取れる。

この乱が平定された後、幕府は天草四万石を没収した。寺沢堅高は自害した。そのため天草は天領となって、城が必要ではなくなったのである。高台にある城跡からの眺めは良い。岬の

付け根の部分には町が広がり、沖には防潮堤が伸びている。一方の当事者松倉勝家も、所領を没収された上に、悪政を咎められて死罪となり、松倉氏もお家断絶となっている。

天草下島の東部に回り、本渡周辺の祇園橋ぎおんばしを見ることにした。これは天保年間てんぽうに祇園社の前に、庄屋が中心となって架けた石橋である。橋脚も橋桁はしげたも切り出された石材で組まれ、当時のままの文化財の上を、人々は徒歩で渡っている。補修もされず、劣化しひびが入っているので、渡る方は恐る恐るになってしまふ。文字通り、「石橋を叩いて渡る」である。この川、山口川も島原・天草の乱当時は、死体の山で血の海と化していたといふ。

すぐ近くに本渡城の城跡がある。豊臣秀吉の時代、キリシタンだった天草五人衆の城に、加藤清正かとうきよまさと小西行長こにしゆきながが攻め入った。清正の攻撃は苛烈かれつだったが、行長はキリシタンだったので、城攻めには乗り気でなかった。この闘いでは男性よりも女性が前面に出て、壮絶な戦死を遂げたと言われる。殉教した者を祀る千人塚があり、キリスト教徒を埋葬した墓を抜けた先には、「天草キリシタン館」が建っている。

資料館に関しては、前日に見学した大矢野島の「天草四郎メモリアルホール」から触れておこう。この島は天草四郎の出生地だとも言われている。館内を進んでいくと、島原・天草の乱の経緯が展示品で説明されている。リ्यूートを奏でる学生や、神学校で学ぶ様子が描かれた絵を見ると、当時キリスト教に改

宗した若者は、神の前での平等を説く教えとともに、西洋の進んだ文明に触れたいという思いがあったことが分かる。もし、その時代に生まれていたら、自分は どうしていただろうか。

最上階は塔のように天井が高く、うす暗い中を、癒しの音楽と光の映像が流れる。足元に花の形をした橙の明かりが、多数ともっている。椅子にもたれて瞑想しながら、天草四郎らの魂が昇天しょうてんしていくさまを、光の上昇の中に思い描くのである。

前日の「メモリアルホール」が感覚的に理解させる施設だったのに対し、天草下島、本渡城跡に建てられた「天草キリシタン館」で目を引くのは、島原の乱の経緯を説明した膨大な資料である。

松倉重政しげまさ・勝家父子が支配した島原藩では、容赦なく重税を

取り立て、年貢が払えない農民には蓑みのを着せて火を放ち、もたえ苦しむさまを「蓑踊り」と称していた。島原の乱の原因には、キリスト教への弾圧とともに、島原藩の暴政が挙げられる。

天草四郎時貞は長崎で学問を修めた十六歳の美少年だった。きらびやかな衣装を身にまとい、水上を歩いたとか、キリストのように病やまいを治したとか、神格化されて祭り上げられていた。百年戦争でフランスを勝利に導きながら、異端の汚名を着せられ処刑された、ジャンヌ・ダルクの男性版と言ってもいい。

一揆を起こした農民らは、浄土宗じょうどしゅうをはじめとする寺院や神社を焼き払い、島原の原城はらじょうに集結した。多くの浪人も混じっており、鉄砲や刀で武装し、城から岩を投げ落とすなどして、

攻め入る幕府軍と激しく戦った。一揆は唐津藩の支配する天草にも飛び火した。

一時は鎮圧に派遣された板倉重昌を、戦死させるほどの勢いがあつたが、知恵伊豆と呼ばれた松平信綱は、兵糧攻めと懐柔策を取ることにした。心ならずもキリシタンとなつた者は罪を許すと宣言して、一揆側の動揺を狙つたのだが、投降する者は限られていた。農民らもそれを阻止していたからである。次第に食糧がなくなり、原城は地獄のような有様となる。足手まといになるような者は、一揆側によつて殺された。

幕府はプロテスタントのオランダに、原城へ大砲を撃ち込ませた。カトリックは同じキリスト教徒でも敵だからである。総攻撃の日が訪れた。一斉に攻め入つた幕府軍は、城にいた者は

すべて、女子供も構わず斬り殺した。数万人が惨殺されたという。

天草四郎時貞も自害したが、むごたらしい死体の山でどれが当人の死体であるか、幕府側も分からなかった。とりあえず、きらびやかな服を着た少年の首をはねて持ち帰り、天草四郎の母親に見せることにした。「四郎はらいそ paraiso (天国) に召されました」と語っていた母だが、少年の首を見せられると泣き崩れたという。

島原・天草の乱は禁教による弾圧と島原藩の暴政から、やむなく農民が立ち上がったわけだが、いくら動機が正当なものであつても、いざ戦を始めてしまつたら、暴力の原理に支配されてしまう。しかも、浪人となつた武士が多数参加していたの

だから、結末は余りにもむごたらしいものとなった。

キリシタンは自殺が禁じられていたから、追い詰められた者は、妻や子供を斬り殺し、自身は幕府側に惨殺された。集団自決のような、日本史で繰り返されてきた悲劇に巻き込まれ、たとえ死を望まぬ者も死を強いられた。この乱で死亡したキリシタンは、現代でも殉教者として認定されていない。

天草の旅もいよいよ終わりが近づいた。午後四時半に「天草キリシタン館」を後にした僕は、友人の車に乗り込んで、天草下島の東岸にある、見晴らしい千巖山せんがんざんに登ることにした。ここは天草四郎時貞が出陣の際に、祝宴を催した地とされている。駐車場まで車で上がり、その先は徒歩で頂上を目指した。巨

石のような岩の間を抜ける。展望台はその先にあつた。松島という地名がついているが、これは陸奥むつの松島に擬して名づけられたのだろう。沖には名も知らぬ無数の島が点在する。もちろん、まりとしていても、小山には木々が茂っている。というのも、ここは典型的な沈降海岸だからである。天草五橋の幾つかはここから見える。雲ゆきが怪しくなってきた。小走りで駐車場に戻ると、発車する頃には本降りとなった。

天草上島は通過するだけだった。かっぱ街道と名づけられた道は、橋の欄干ごとに石造りの河童像かっぱが載っている。島々を抜けて宇土半島に入った。にわか雨はやんで、ちょうど日没の刻限となっていた。港に停泊した船の脇に広がる海面は、残照で火のように揺らめいていた。天草下島で見られなかった日没を、

九州本土から眺めることができた。

雲仙地獄と島原半島

八月の初旬、僕は友人の車で島原半島に向かっていた。ここは昨年春訪れた天草とともに国立公園に指定されている。キリスト教が禁止されていた時代、キリシタンと浪人、農民が団結し、幕府に抵抗したものの、最後は皆殺しという惨劇となった島原・天草の乱が勃発した地でもあるのだ。

水田が広がる佐賀県内を抜け、半島の付け根である諫早に入った。島原鉄道の線路から離れて、西側に広がる橘湾たちばなわん沿いを進んだ後、小浜おほまから山道を上つていくと、焼けるような暑さも少しやわらいだ。

雲仙温泉うんげんに到着したのは、午後一時過ぎだった。小高い丘の

上には、奈良時代の大宝年間、行基ぎょうきによって開かれた満明寺まんみょうじが建つ。釈迦如来が拝観できるが、大日如来を本尊として祀る真言宗の寺院である。雲仙地獄があつたからこそ、ここに寺院が建てられたのであり、雲仙とともに信仰されてきたのだが、たびたびの火災で伽藍がらんが焼失し、往時の勢いは失われてしまった。

雲仙という地名は、温泉に由来するという。温泉街を貫く通りの両側から、硫化水素を含んだ蒸気が立ち上っている。小地獄では温泉卵を売っている。山側の地獄の方が規模は大きい。崖下に広がる八万地獄は、広大な荒れ地だが、ガスの噴出口が変わつたのだろう。すでに噴気は出ておらず、見捨てられた採石場の跡のように見え、白い石が一面に広がる賽さいの河原といっ

た感じである。山道を下つた所にある原生沼げんせいぬまは、泥がたまつて水面は見えず、笹がたくさん生えていた。

元来た道の途中で、雲仙お山の情報館という看板が目に入った。無料なので見学してみることができる。ここでは雲仙の火山としての成り立ちを学ぶことができる。橘湾は海底部分がカルデラとなっており、その下にはマグマだまりがあるのだという。そこから上ってきたマグマが、延々と地下を流れていき、普賢岳ふげんだいから噴出しているということだ。マグマは粘り気が強いために熔岩ドームを形成し、崩れて火砕流を発生させる。四十四名の犠牲者を出した灼熱しゃくねつの黒煙は、こうして半島の中央から顔を出したわけである。

盛んに噴気を上げている地獄を、最後に一周することにした。

清七地獄はキリシタンだった清七が処刑された頃噴き出した。お糸地獄は、裕福な家の女房だったお糸が、不義密通の末に夫を殺害し、死罪となった頃噴き出したとされる。泥の中から噴き出す熱湯が噴出していて、煮えたぎっているさまは、まさしく地獄である。

江戸時代の初期、棄教を拒んだキリシタンの多くが、噴き出す上の中で、逆さ吊りの拷問にかけられた。耐えきれずに棄教を申し出た者も多かったが、火山ガスを吸わされたまま命果てた者もいたという。外れにある雀地獄は、噴き出す音が雀のさえずりに似ているからだが、指でも突っ込もうものなら火傷するだろう。

仁田峠にたとうげに向かうことにした。管理所に百円カンパして通行する。道は狭いが片道通行だから、運転は快適である。橘湾を見下ろした。展望台からは、遠く宇土半島うとや天草の島々まで眺められた。こんな晴れ上がったのは久しぶりだ。

峠に到着した。駐車場に車を止めておく。無数のトンボが舞っている。ここからでも、普賢岳と熔岩ドームの平成新山は眺められる。標高では平成新山の方が高い。茶色い岩が積み重なった感じで、非常に崩れやすいという。頂上からは微かに噴煙が出ている。

妙見みょうけんまではロープウェイで上る。国立公園で最初に敷設されたロープウェイだとのこと。妙見駅は見晴らしが良くないので、妙見岳の頂上にある展望台まで登っていく。地図で見たよ

りも、ずっと近くに見える。すぐ隣の山といった感じである。もし今噴火したら、軽くここまで噴石が飛んでくるだろう。平成新山の方は、砕けたレンガが積み重なったようで、あの上を歩くことは無理だろう。

その日は島原市内のホテルに泊まった。部屋の窓から、島原大変で崩壊した眉山まゆやまが見えた。十八世紀の末に雲仙普賢岳が大噴火し、強い地震も起こって眉山が崩壊し、有明海に流れ込んだ土砂で大津波が発生した。天草や熊本でも多数の死者を出す大惨事となった、いわく付きの山なのである。島原温泉について言うと、温度がちよつと高めで、ゆつくり入ってはいられない。ホテルの露天風呂は、海に面したベランダだったので、素

裸のまま風に当たるのが気持ちよかった。

翌朝、まず島原城に向かった。この城は廃藩置県で廃城になり、戦後に復元されたもので、内部は資料館となっている。実は昨年、天草を旅していたため、キリシタン殉教の歴史については知っていた。

マリアかん観音や十字を象かたどった石塔、踏み絵や雲仙におけるキリシタンへの拷問の図などを見た。一揆軍と戦った仏僧の武器なども。島原の乱に参加した者は、女子供を含めて皆殺しになったので、他国の農民に無償で土地を分け与えると、応募するものが殺到したという。

天守閣の窓から町を眺めていると、サイレンが鳴った。午前11時2分、その日八月九日は長崎に原爆が投下された日だった。

黙禱もくとうを捧げた。

島の外まで平戸かな

島原城を出たのは昼近かった。友人の車で有明海沿いを進んでいった。途中から右折し、諫早湾を仕切った防潮堤沿いの海中道路を突っ走る。有明海の肺と言われ、水質浄化をになつていた諫早湾も、淡水化されて生物が死に絶え、汚濁が進んだ現在では、水門を開くことで、かえって有明海の生態系を乱す恐れがある。

ハウステンボスの横を通り過ぎ、遅い昼食をとった。佐世保に出たところで、九十九島くじゅうくしまたに寄ることにした。沿岸に横たわる島々を見下ろすには、高台に向かわなければならぬ。展海峰てんかいほうに立つと、夏の光にかすんで、はるか沖まで島々が横たわって

いる。遊覧船で巡るより、ここに来た方が余程島々の存在を感じることが出来る。

これと似た景色は、志摩半島の英虞湾、横山展望台で見たことがある。スリランカ人の研修生が来ていた。天真爛漫な若者たちで、日本語教室の女の先生と遠足に来たのだろう。手すりに小さな緑のカマキリが留まっていた。写真を撮ろうとレンズを近づけたら、飛びかかってきた。

運転席の横で居眠りしていると、友人の「間違えた」という声で目が覚めた。平戸を目指していて、平戸大橋を渡ってしまったのだ。実は、今日泊まるホテルは、平戸市といっても本土側の田平たびらにある。橋の上から十階建てのノッポビルが見えてき

た。

僕は今まで、こんな豪華な部屋に泊まったことがなかった。和室のほかに大きなソファアが置かれた応接間、ベランダからは海峡を隔てて平戸島も、先ほど渡った平戸大橋も一望できる。ベッドが置かれた寝室、トイレは自動で便器が動く。巨大な鏡のついた洗面所、温泉が出る浴室からも、海峡が見渡せるのだ。あまりの素晴らしさに圧倒された。

夕食の時間はバイキング形式で、ビールや冷酒、ワインなども飲み放題だった。窓からは夕闇に沈みつつある海峡と、ライトアップされている平戸城も見えた。

突然、正面の舞台の幕が上がり、演歌歌手の舞はる美さんが、銀色に光るドレスで登場した。水前寺清子の歌を歌っているよ

うだ。きちんと聞きたくない客を相手にするのは、かなり辛いことだろう。歌い終わると一部の客は手を叩いているが。しかも、ショーが終わると、各テーブル席に挨拶して回るのである。芸能人という仕事も、華やかな割には厳しい世界だと感じた。

翌朝、海峡を眺めながら部屋の温泉に入る贅沢を味わった。こんな豪華な部屋に住めたらなああと、友人と話し合った。非日常的な時間は長くは続かない。後ろ髪が引かれる思いがした。チェックアウトしたのだが、ホテルが企画したクルージングが控えていた。マイクロバスに乗り移り、下の港の方に移動した。港で救命胴衣を身につけた。

総勢百名弱が、船四艘そうに分乗した。船はたがいに速さを競い合ったりするので、船尾は波しぶきを浴びるとのことだった。そして出発！ 白い船体がゆつくりと港を出ていく。

ぐんぐんエンジンの回転が速くなる。波が静かな海峡なのだが、猛スピードで走り抜ける船のうねりで、左右に大きく揺れだした。まずは島の北端に向かい、引き返してオランダ商館や平戸城の横を抜けると、今度は平戸大橋に向かって突進した。橋の下で速度を落とし、希望する客の写真を撮っていく。帰港したのは十時半。三十分程度の船旅だったが、スリル満点で充実していた。

いったんバスでホテルに戻った後、友人の車で平戸大橋を渡

り、対岸から見えた平戸城を目指した。平戸藩と言えば、『甲子夜話』で有名な松浦静山がまず思い浮かぶ。学問好きで文人のお殿様で、随筆は当時の政治や社会風俗を知る上で貴重な資料である。

松浦氏と言えば、古くは松浦水軍を持ち、中世には倭寇の一翼を担った武士団である。関ヶ原の戦いには参じなかったため、徳川幕府の覚えがめでたくなかった。そのため、藩主自ら城を焼いてしまったという伝説がある。

十八世紀に改めて、幕府に築城を願い出て許されたという。現在の平戸城は城門以外は、昭和になってから再建されたものである。内部は博物館のようになっている。嵯峨天皇から分かれた源氏である松浦氏の系図が、壁に飾られていた。

松浦氏は海運に力を入れたので、城下には家臣を住まわせず、丘陵地に屋敷を作らせた。展示物の中では、鎧兜や若君の遊び道具だった男の子の人形、姫君が遊んだ貝合わせなどが目を引いた。

昼食後に、再建されたオランダ商館に向かった。徳川秀忠の時代まで、朱印船貿易が盛んに行われ、東南アジアには日本人町も作られた。その頃、オランダ人は台湾を占領する一方、ここ平戸島に商館を開いて、本格的に日本との交易を始めていた。オランダ人はプロテスタントで、カトリックのポルトガル人とは犬猿の仲だった。ポルトガル人は交易とともに布教も熱心だったので、オランダ人はライバルを追い込む策を練っていた。幕府がポルトガルを警戒したのも、カトリックが信仰を侵略の

手段としていたからで、島原の乱が勃発すると、オランダは幕府の要請を受けて、カトリックが立てこもる原城に大砲を撃ち込んだりした。

しかし、キリスト教に対する猜疑心さいぎしんは、平戸島で商館を開いていたオランダ人にも及び、ポルトガル人の監獄と呼んでいた長崎の出島に、オランダ人自身を閉じ込めることになるのである。

平戸島のオランダ商館は閉鎖されてしまい、詳しい実態は明らかになっていない。発掘作業からは、基礎の部分は確認されているが、それ以外は排水溝など、一部の施設が認められたに過ぎない。再建された建物も、古文書などをもとにイメージされたものである。

当時の地図を見ると、北海道がシベリアとつながっていたり、オーストラリアの存在が明らかでなかったりする。しかし、南北のアメリカに関しては詳細な地図が作成されており、マゼラン海峡を通過して、オランダ人が来日していたことが分かる。

再建されたオランダ商館の中では、中世風の絵画、騎士がまとった鉄製の鎧よろい、オランダ製の大砲などが目を引いた。二階では当時のオランダ人が楽しんだ玉突きなどのゲームを、入場者も楽しめるようになっていた。スマートフォンがあれば、Wi-Fiで解説を聞くこともできる。

少しドライブしようということになったが、僕は疲れて居眠りしてしまった。友人が起こしてくれたとき、平戸島から橋を

渡って、生月島いきつきしまの塩俵の断崖前に着いていた。殺風景な草原の先に、柱状にひびの入った崖が続いている。生月島の北部からだと、平戸島の島影さえ遠くに見える。

平戸島に近い生月島も、隠れキリシタンが多く住んでいた島で、江戸時代は平戸藩の領地だった。塩俵の断崖のさらに先、大濬鼻灯台おおおぼえまで車で行った。クロツバメシジミという蝶が飛んでいる。これを捕らえると、懲役六ヶ月なのだそうだ。

崖の手前に建つ無人の灯台は、カラスの群れに占領されている。伊万里方面から来た熔岩が、波で削られてこの断崖になったのだという。阿蘇山の巨大カルデラ噴火を指すのだろう。

平戸島に戻ることになった。生月大橋が下方に見えてきた。

ブルーのトラス橋である。そのまま九州本土に渡る前に、僕は川内峠かわちに行きたいと言った。平戸島を観光する際、まずお勧めなのがオランダ商館で、次が川内峠だというので。

ナビにも載っていなかったが、標識をたどりながら何とか到着した。丘の上に草原が広がっている。ゆるやかな曲線を描く海岸線が、白く輝く海原に接している。少し雲が多かった。快晴で夕暮れまでいられたら、絵になる写真が撮れそうだった。しかし、時間がない。もう午後六時である。

「旅の終わりとしては、素晴らしい景色を眺められたね」

一面に緑が広がる丘の上に立ち、ワイルドな風景の真ん中に立っていると、きな臭い現実を忘れて自由を感じることができた。

「指宿」は「いぶすき」

久し振りの九州だった。熊本地震が発生する一ヶ月ほど前のことである。九州の地名は読みにくい。「指宿」いぶすきを読める人は、地理に詳しい方だろう。鹿児島市と桜島には行ったことがあるが、「指宿」は難読だから子供の頃から気になっていた。温泉地としても有名なので、福岡で友人と合流し、一緒に旅することにした。

羽田空港は曇っていた。昼頃まで雨が降っていたから。仕事を早めに終えていた。午後五時過ぎ、離陸してすぐに多摩川が見えた。たちまち、気流と雲の中に入り、機体は細かく揺れる。と思った途端、雲の上に出た。上空は晴れ上がっていた。下界

はすっかり雲に覆われているが、西の彼方は赤く燃え、黄色から白、大空の青といった感じでグラデーションを描いている。雲海とはよく言ったものだ。波の形はどれ一つとして同じものはない。帯のように、巨大な生物の背骨のように連なるもの、龍の鱗うろこのように、光を浴びて輝いているもの。雲の波は時の流れの中でも、ほとんど形を変えない。それほど、悠然としたものだ。大空を駆ける翼は読み取り機のように、下界に広がる大気の彫刻をスキャンしている。

福岡空港に着陸したのは午後七時過ぎ。その夜は友人の部屋に泊めてもらった。夜が明けると、小雨が降っていた。博多駅に出ると、午前10時10分の九州新幹線に乗車する。指定席は左

右二列で前後の間隔もゆったりしている。茶系統のデザインでシックな印象である。しかも揺れが少ないから、東海道新幹線と比べて、乗り心地の差は歴然としている。ただ、防音壁とトンネルが多いので、車窓の風景は単調である。

友人と話していたら、熊本駅が近づいてきた。この一ヶ月後に大地震に襲われることなど、知るよしもなかったが。その日三月十二日は、くまモンの誕生日だった。九州新幹線開通を記念して、熊本をアピールするロゴをデザインする話が、熊本の「くま」という言葉と、熊本の「者」を意味する「モン」を合わせたゆるキャラを誕生させる話に発展した。今や海外でも有名なゆるキャラ界のヒーローである。熊本城の天守閣が見えてきた。屋根瓦が落下する前の雄姿である。

少し居眠りしたら、もう鹿児島中央駅に到着してしまった。光の強さが福岡とは違う。三月中旬といっても南国だから、もう春たけなわの陽気である。快晴だった。鹿児島は二度目であるが、ちょうど二十年ぶりである。そんなに時間が経ったという気はしないのだが。

時間の余裕がないので、そのまま指宿枕崎線のホームに向かった。国鉄がJRに再編されて以来、九州の赤字ローカル線も多くが廃止された。枕崎が終点となったこの路線も、鹿児島交通枕崎線と接続していたが、伊集院までの私鉄が廃止されたことで、薩摩半島の先端で行き止まりになってしまった。

指宿枕崎線の廃止を防いでくれているのが、観光列車の特急

玉手箱号である。この名前は、指宿が浦島伝説と関わりがあることにちなんで名づけられたという。普通列車の車両を改造し、外装は黒と白の二色に塗り替え、椅子は車窓と向かい合うように設置されている。発車のベルがなって、エンジンがフル回転する音がした。ディーゼルカーが高台に差し掛かると、桜島の全景が海上に浮かび上がって見えた。

車内販売が来た。卵のプリンと胡麻プリンの二層になったお菓子を食べた。これは玉手箱号のデザインを模した物である。サツマイモの発泡酒は芋焼酎のような匂いがした。飲みながら、半生の鰹かつおスライスを食べた。指宿まで一時間足らずの旅だったが、途中、乙姫おとひめさま様の姿をした女性が、乗車記念に玉手箱の形したお菓子を配っていた。

特急玉手箱号の終点は指宿駅である。改札口を出ると、鰹節とお茶の接待を受けた。駅の近くのコンビニで弁当を買って、ふたたび指宿枕崎線の下りに乗った。JR九州が指宿く枕崎間を廃止するのではないか、という憶測が流れている。確かに、指宿を過ぎると乗降客が激減する。

西大山駅で降りた。ここはJR最南端の駅として知られている。何にもない閑散とした駅だが、最南端にあるので、鉄道マニアの人が集まって、発車する列車を撮影している。線路の先には開聞岳かいもんだけがそびえている。踏切までの風景はのどかで、昭和時代の面影を感じた。

線路の先に見えるのは、大きな開聞岳である。薩摩半島の南端は、この火山の支配下にある。駅で弁当を食べて、四十分ほ

ど駅の周辺でのんびりした。指宿枕崎線が廃止されれば、この風景も過去の物となるのだろう。

普通列車で指宿駅に戻った。国民休暇村の送迎バスが来た。チェックインして、泊まる部屋に入った。海側には青い錦江湾。大隅半島がすぐ沖に見える。湖のように見えるが、海底には阿多カルデラが眠っている。巨大なマグマの塊が。西大山駅では、開聞岳しか目に入らなかつたが、本当の主は海の底に眠っている。遠い未来に牙を剥くまでは。

巨大なガラス窓に向かつて、ベッドが二つ並んでいる。広々とした空間は、まるで映画に出てくるホテルのようだ。荷物を置いた後、知林ヶ島ちりんがしまに行こうと友人に誘われた。大潮の時期、干

潮の間は砂州が現れて、歩いて渡れるという。

海沿いを進んでいき、岩の岬の脇を降りていくと、ずっと先に山そのもののような島が見える。砂に足を取られてなかなか進めない。午後六時前には水没するというからゆっくりはしてられない。

快晴だったが、日が傾いてきたから、空の青は幾分あせている。立ち止まっていると、風が冷たくなつた。波は穏やかだが、両側から打ち寄せてくるので緊張する。数時間前まで海底だった所は、砂が黒く湿って固い。

この風景は北斎ほくさいの『富嶽三十六景』ふかくで見た江ノ島に似ている。江戸時代は橋がなかったから、参詣する客は今日のように、砂州の上を歩いていったのだ。当時は埋め立てた平地もなかった

が、三重塔が建っていた。江ノ島は神社ではなく、弁財天を祀る金龜山きんきざんと願寺がんじ(岩本院いわもといん)という寺院だった。

知林ヶ島の頂いただきには東屋あずまやも見える。ただ、現在はそこまで登る道が崩れ、通行できなくなっている。島の岸辺に渡ったところで一休みした。満潮までもう時間がなかった。砂州をたどって岬まで戻っていくのだが、行きに見たときよりも、砂の幅は狭くなっている。しかも歩き疲れたせいで、行きよりも遠い気がした。

ホテルに戻ると、砂湯に入ることにした。四角い大きな囲いの中に100度の温水を流し、少し経ってから湯を落とす。男性三人がかりで、固くなった砂を掘り返す。その頃には砂は48度前

後になっている。

友人と僕は作務衣さむえを着て、タオルで頬被りして待っていた。人型に掘られた所に横たわり、足からお腹、首もとまで埋められていく。お湯を吸っているから二十センチほどでもかなり重い。生き埋めにされたら、重さだけでもかなりの苦しさを感じるだろう。十五分が限界だと思った。暑くて顔も汗をかき、目にしみそうになった。

砂湯から戻ると、すぐに夕食だった。マグロやキビナゴの刺身、豚しゃぶ、黒豚のトンポーローに、バイキングだった。特に美味しかったのは、揚げたてのさつま揚げだった。具だくさんの豚汁も。生ビールに冷酒も飲んだ。

部屋に戻って、ベッドの上に横になる。疲れて居眠りしてし

まう。十一時半になった。急いで大浴場に行き、浴槽にゆつたり浸かった、夜の海を臨みながら。

六時半に日の出。錦江湾の朝日を写真に収めた。向かいの大隅半島から太陽は昇り、次第に穏やかな海面に赤い光が広がっていく。まるで湖のように、さざ波しか立っていない。凪ないで大気も澄んでいるし、対岸もそれほど遠くに見えない。

朝食を終えて、九時五十分にチェックアウト。友人と向かったのは池田湖だった。九州最大の湖を見てみたかったからだ。本土の中で雄大な風景が広がるのは、北海道と九州なのだが、それは巨大な火山が作り出したものでもある。とはいえ、北海道に多いカルデラ湖が、九州では至って少ない。原因はカルデ

ラの多くが海中に眠っているからだ。あの錦江湾のように。九州で数少ないカルデラ湖が、これから向かう池田湖である。果たして、摩周湖のような美しさが待っているのだろうか。

バスに乗り込んだのだが、乗客は友人と僕の二人だけ。いやな予感がした。空は曇ってしまったし。途中で降り降りする人はいいたが、終点で降りたのは、やはり二人だけだった。九州一のカルデラ湖といっても、ほぼ円形で風景に変化が乏しい。しかも高地ではないから、爽やかな風が吹いてくるわけでもない。名物はないかと探したが、大ウナギとネツシーもどきのイッシーしか見当たらない。

何だが拍子抜けしてしまった。右方の開聞岳はふもとが丘に隠されている。黒鶺くろがうが数羽、湖面を泳ぎながら餌を探していた。

水面に光の波紋が映っている。湖岸に花が植えられているので、気を取り直して写真を撮った。

池田湖に来る途中で通り過ぎた、ながさきばな長崎鼻へ行くことになった。三十分ほどバスに揺られた。停留所で下車して、ぐんぐん海岸に向かって下りていく。岬の突端まで行く途中、夫婦喧嘩で閉店中という看板を出した店があった。みやげ物屋である。テレビでも紹介されたらしい。今日も夫婦喧嘩しているのだろうか。店の中には人影もない。全国に放送されたというのに、開店休業の状態である。仲直りしたら看板は出せないし、喧嘩していたら素通りされるし。

下に朱塗りの神社が見えてきた。りゅうぐうじんじや龍宮神社といい、以前はほこら祠

が祀ってあるだけだったが、やしろ真新しい社を建立して、浦島伝説の名所として振興する意図も感じられた。亀に乗った浦島太郎の像もあった。乙姫様に持たされた「玉手箱」は何だったのだろう。開けることを予想して渡したのだとしたら、悪意は感じられないだろうか。

南国の潮風が吹いてきた。岬の先端は火山岩が削られた荒々しい磯浜だった。波が砕ける音が下からとどろ轟いてくる。男性的な風景で気持ち引き締まった。

バスに乗ってヘルスセンター前で降りた。昼食を食べたあと、玉手箱の湯に向かった。ふと、右方の海岸に目をやった。何やら奇妙なものが見える。温泉を利用した製塩所跡らしい。塩田

には熱湯の下に塩が沈んでいる。温泉そのものが塩分を含むので、製塩には最適だったのだろう。壊れたパイプから湯が噴き出しているさまが、生きた廃墟といった雰囲気を醸し出していた。

五千年ほど前に池田湖から出た火砕流が、この辺りを焼き尽くしたという。あんなさざ波も立たぬ湖の底にも、灼熱のマグマが眠っていたのかと不思議な気がした。七三〇〇年前の鬼界カルデラの巨大噴火で、南九州の縄文人は全滅したと言われるが、その後も小規模なカルデラ噴火は続いていたというわけか。崖の下には屋外の砂湯があり、顔だけを出した人々の姿がよく見えた。

玉手箱の湯に入った。ここは日替わりで、開聞岳が見える湯

と竹山たけやまが見える湯を、男女で交換していた。奇数日だったので、竹山の方でがっかりした。竹山も火山が生んだ奇景で、天に突きだした急峻ききゆうしゅんな斜面では、かつて山伏が修行をしていたという。

浴槽から出た所で海側に出ると、左方に開聞岳が望めた。山裾やますそがそのまま海に続いている。目の前で錦江湾も眺められ、雄大さに息を呑んだ。温泉を出たところで、小雨が降ってきた。

帰路は指宿枕崎線の各駅停車に乗った。ディーゼルカーは音を立ててよく揺れる。一時間半近くかかるらしい。その夜は鹿児島のホテルに泊まることになっていたが、今回の旅はほぼ終わったようなものだった。

あとがき

僕が初めて九州に行ったのは、一九九六年（平成八）のことである。まだ三十代の半ばで、青春の余韻を楽しんでいた頃である。それから十六年間は足を運ぶことがなかったが、友人が福岡に転勤したのを機に、九州各地を回るようになった。

最後に訪れたのが、二〇一六年の春で、九州新幹線に乗ったのだが、そのわずかひとつき後に、熊本地震が発生した。九州新幹線も脱線し、熊本城や阿蘇山周辺に大きな被害を与えた。その傷跡はまだまだ残されたままで、阿蘇大橋は崩落し、阿蘇駅以西の豊肥本線や、南阿蘇鉄道も一部を除いて不通のままである。一日も早い復旧を願ってやまない。

九州の風景がなぜ変化に富んでいるのか。それは火山のおかげである。火山は噴火や地震などの災害を引き起こす反面、湖や湾を形作り、肥沃な大地を生み出す。心身の疲れを癒す温泉も、火山がもたらした恵みである。そのため、阿蘇に近い肥前や肥後は「火の国」と呼ばれていた。ちなみに、「九州」という語源は、九州本土にあった九つの国に由来する。古代の行政区分では、九州は西海道さいかいどうに属していた。そこで、九つの国を巡った旅行記を『西海道の旅』と名づけることにした。

巻末に、僕が実際に旅した年月日と行程を記しておこう。

一九九六年

三月二十日 出発。広島の厳島神社に参拝。広島泊。

三月二十一日 別府に到着し、宿泊。

三月二十二日 別府の地獄巡り。阿蘇へ行き、草千里で遊ぶ。阿蘇泊。

三月二十三日 草千里で一日遊ぶ。阿蘇泊。

三月二十四日 南阿蘇鉄道で高森に出、バスで高千穂峡へ。天岩戸神社参拝。高千穂泊。

三月二十五日 鹿児島に向かい、城山展望台に上る。桜島泊。

三月二十六日 桜島観光。鹿児島島の仙巖園と尚古集成館を見学。桜島泊。

三月二十七日 桜島を立ち、博多を經由し新幹線で帰郷。

二〇一一年

三月二十五日 出発。福岡の大濠公園と福岡城趾を見学。福岡泊。

三月二十六日 市内の東長寺に参拝。福岡泊。

三月二十七日 海の中道、志賀島を車で巡る。福岡泊。

三月二十八日 太宰府天満宮に参拝。福岡空港から帰郷。

九月二日 出発。福岡泊。

九月三日 阿蘇ファームランドで入浴する。阿蘇泊。

九月四日 阿蘇の草千里を再訪する。高千穂峡に出て、旧高千

穂鉄道のスーパーカーに乗る。福岡泊。
九月五日 能古島に渡る。福岡空港から帰郷。

二〇一二年

三月二三日 出発。福岡泊。
三月二四日 長崎の爆心地と原爆資料館を訪れる。次いで、
グラバー園、眼鏡橋にも足を伸ばす。長崎泊。
三月二五日 長崎の出島を訪ねた後、船で伊王島に渡る。長崎
中華街で夕食を取る。その夜、福岡に戻る。
三月二六日 福岡空港から帰郷。

二〇一四年

三月七日 出発。福岡泊。
三月八日 福岡を出て、三角で休憩した後、天草五橋の第一号
橋で大矢野島に渡る。天草四郎メモリアルホールを見学。天草
下島の下田温泉に宿泊。
三月九日 福岡城を訪れた後、通詞島からイルカ・ウオッチン
グの船に乗る。午後は天草キリシタン館を見学する。千巖山に
登った後、天草五橋を渡り、熊本を通って福岡に戻る。
三月十日 福岡空港から帰郷。

二〇一五年

八月七日 出発。福岡泊。

八月八日 福岡を出て、昼過ぎに雲仙温泉に到着。雲仙地獄を巡る。仁田峠からロープウェイに乗り、展望台から雲仙普賢岳を間近に見る。島原市内に宿泊。

八月九日 島原城を見学。佐世保を通り、九十九島を見た後、平戸市内に宿泊。

八月十日 平戸瀬戸でクルージング。平戸城とオランダ商館を見学。生月島に渡った後、平戸島の川内峠に出る。その夜、福岡に戻る。

八月十一日 福岡空港から帰郷。

二〇一六年

三月十一日 出発。福岡泊。

三月十二日 博多から九州新幹線で鹿児島中央駅に出る。指宿枕崎線の玉手箱号に乗る。西大山駅まで乗り継ぎ、開聞岳を見る。指宿に戻り、知林ヶ島に行く。砂湯を体験。指宿泊。

三月十三日 池田湖を訪れた後、長崎鼻、玉手箱の湯に入る。鹿児島泊。

三月十四日 桜島に渡る。鹿児島に戻り、鹿児島空港から帰郷。

二〇一九年三月二十一日

高野敦志